3．古墳時代～平安時代

概要

今回の調査で、小林遺跡Ⅰ区～山神遺跡Ⅱ区にかけて、竪穴式住居址は古墳時代後期鬼高期が13軒、奈良時代のものが５軒、平安時代のものが２軒検出された。また、当該期の住居とは思われるが時期の比定ができなかったものが12軒あり、総数32軒になる。

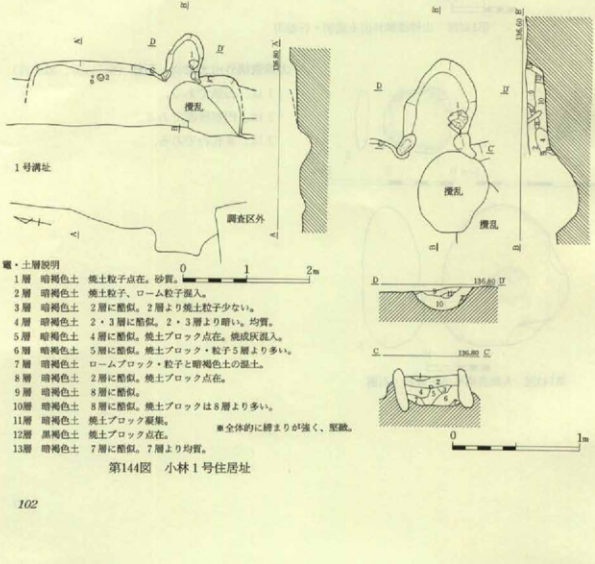
ほかに当該期の遺構は掘立柱遺構が１棟。道状遺構１条が検出している。

小林１号住居址（第144図、PL－20）

本住居址は、小林Ⅰ区の南部（An，Ao－17，18G）に位置し、１号溝址に中央から西部分を切られるため、判然としない点が多い。

平面形態は、南北に長い隅丸長方形を呈すると思われ、南北3.2mを測る。壁高は東壁で11.4～23.4cmを測り、壁溝は無い。床面は、ほぼ平坦であるが締まりは強くなく、堅緻面も確認できなかった。柱穴及び貯蔵穴は検出されたなかった。また、調査区外北の県道大胡－藤岡線から宅地への導入路となっており、覆土は堅く締まって、竈内出土の器厚の薄い土師器の検出・取り上げに手間取った。

竈は、東壁の中央やや南寄りに付設される。袖部は20×30cm大の円礫を暗褐色の粘質土で固定・付設



第144図　小林１号住居址

する。燃焼部は奥壁に向かい長楕円形を呈し、住居壁外に張りだす。被熱の程度は低い。燃焼部内右寄りから土師器・壺が出土している。右袖手前は木根に依る攪乱のため破壊されている。

本住居址からの遺物出土は少なく、竈燃焼部内出土の土師器・甕以外では、東壁寄りで床面から約7cmの間層をおいて2が出土したほか、2の周辺から土師器片が数片出土した程度であった。

小林1号住居址出土遺物（第145図、第57表、PL—79）

1は、竈燃焼部内から出土した土師器・甕で、土圧のため全体に亀裂が入り、検出・取り上げに手間取った。また、被熱のためか、胴部中央の内外面に煮沸痕及び煮沸痕様の剝離があり、調整の方向・規則性の把握が難しい。底部を欠く。

2は、東壁寄りで出土したロクロ整形・還元焔焼成の杯で、ほぼ完形。

第145図　小林1号住居址出土遺物

小林2号住居址（第146図、PL—21）

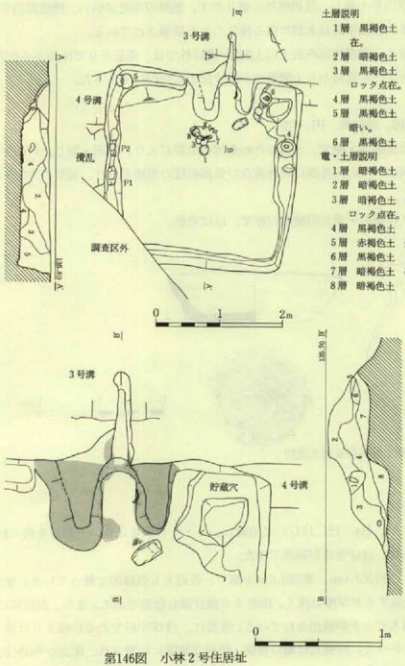
本住居址は、小林Ⅲ区の北部（At，Ba—16，17G）に位置し、3・4号溝址に竈の一部分を切られ、南西隅が調査区外に存在するほかは、ほぼ全体が調査できた。

平面形態は隅丸の正方形を呈し、南北3.0m、東西3.0mを測り、各辺とも直線的で整っている。壁高は49.5～56.5cmを測る。壁溝は全周するが深度は浅く、床面より幾分窪む程度である。また、西壁溝に、床面からの深度6.2cm及び7.7cm測るピットが検出されている。床面は、ほぼ平坦であるが締まりは強くなく、明確な堅緻面も確認できなかった。貯蔵穴は竈の右側・住居北東隅に付設され、床面から59.7cmの深度を測る。柱穴は検出されなかった。

竈は、北壁の中央やや東寄りに付設される。袖部は暗褐色の粘質土で作られ、燃焼部は奥壁に向かい長楕円形を呈する。右袖前面床直上から扁平な石が出土しており、竈の構築材と推定できる。

覆土全層に多量のロームブロック・粒子を含み、本住居址の廃棄・埋没において、何らかの人為的要因の働いた事が推定される。

本住居址からの遺物出土は多く、完形個体の多量出土が注目される。出土状況の特徴として貯蔵穴周辺及び竈左袖前面に集中する傾向を示すとともに、4から5の甕は、順位で出土していることも注目される。また、5の甕は住居址北西隅から出土している。



土層説明
1層　黒褐色土　ローム粒子混入(均質)。ロームブロック点在。
2層　暗褐色土　ロームブロック・粒子混入（均質）。
3層　黒褐色土　ローム粒子（少量・均質）混入。ロームブロック点在。
4層　黒褐色土　3層に酷似。3層より明るい。
5層　黒褐色土　3・4層に酷似。3層より明るく4層より暗い。
6層　黒褐色土　粘質土。

竈・土層説明
1層　暗褐色土　粘土ブロック・粒子混入。
2層　暗褐色土　ロームブロック・粒子混入。
3層　暗褐色土　ロームブロック・粒子混入（多量）。粘土ブロック点在。
4層　黒褐色土　ローム粒子（均質）混入。覆土中最も暗い。
5層　赤褐色土　焼土ブロック・粒子の層。
6層　黒褐色土　ローム粒子混入。
7層　暗褐色土　砂質。均質。
8層　暗褐色土　2層に酷似。ローム粒子2層より少ない。

第146図　小林2号住居址

小林2号住居址出土遺物（第147図、第58表、PL－79）

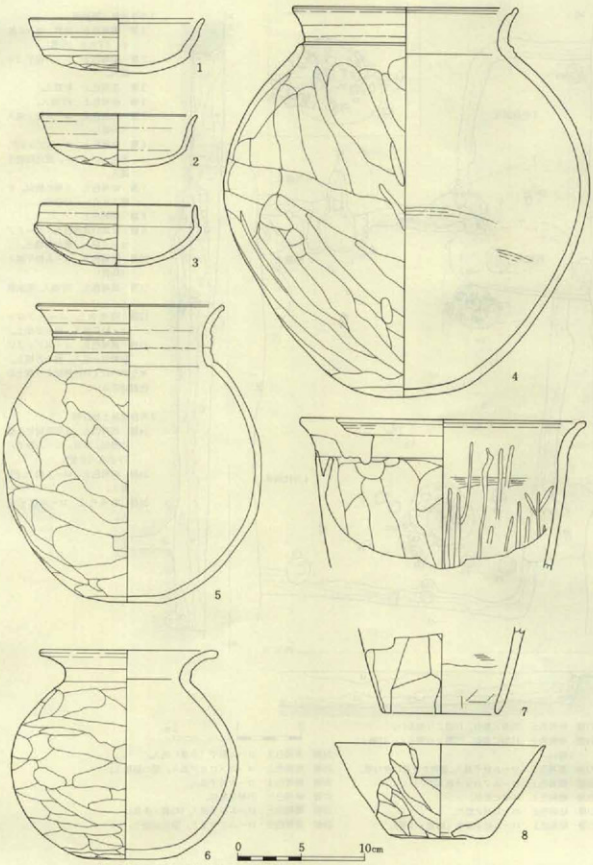
1～3は土師器・杯で、1は竈左袖の前面から、2は貯蔵穴脇から、3は覆土中からそれぞれ出土している。

4は土師器・甕で、貯蔵穴脇の東壁際で出土している。

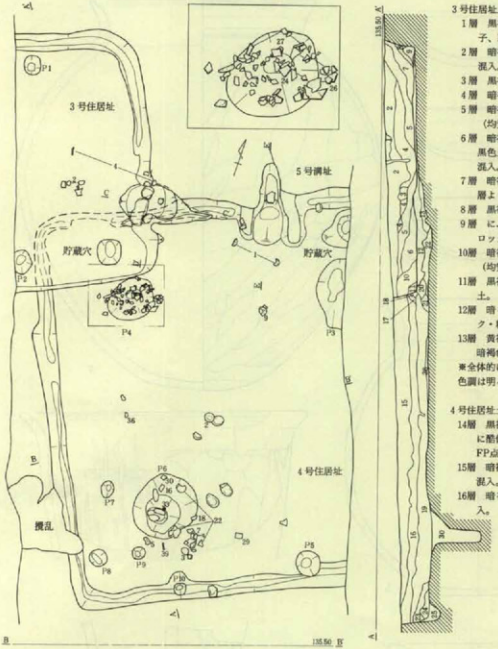
5は土師器・甕で、住居北西隅から出土している。

6は土師器・甕で、貯蔵穴脇から出土している。

7・8は土師器・甑で、ともに竈左袖の前面から出土している。



第147図　小林２号住居址出土遺物

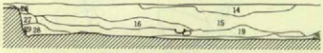


3号住居址土層説明

1層　黒褐色土　砂質。ローム粒子、FP点在（少量）。
2層　暗褐色土　ローム粒子、FP混入。
3層　黒褐色土　粘質土。
4層　暗褐色土　FP混入。
5層　暗褐色土　ローム粒子混入（均質）。
6層　暗褐色土　ロームブロック、黒色土ブロック、炭化物粒子混入。
7層　暗褐色土　6層に酷似。6層よりローム分強い。
8層　黒褐色土
9層　にぶい黄褐色土　ロームブロック混入。壁の崩壊土。
10層　暗褐色土　ローム粒子混入（均質）。
11層　黒褐色土　FP混入。壁崩壊土。
12層　暗褐色土　ロームブロック・粒子混入。掘り方埋土。
13層　黄褐色土　ロームブックに暗褐色土混入。掘り方埋土。
※全体的に4号住居址より覆土の色調は明るい。

4号住居址土層説明

14層　黒褐色土　3号住居址1層に酷似。砂質。ローム粒子、FP点在（少量）。
15層　暗褐色土　ローム粒子、FP混入。
16層　暗褐色土　ローム粒子混入。

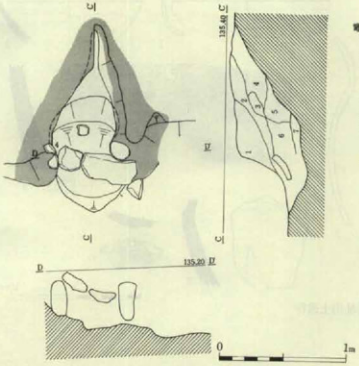


17層　暗褐色土　15層に酷似。15層より明るい。
18層　暗褐色土　15層に酷似。15層より明るく、17層より暗い。
19層　黒褐色土　ローム粒子混入。遺物を多量に含む層。
20層　暗褐色土　ロームブロック混入。
21層　暗褐色土　20層に酷似。
22層　暗褐色土　20・21層に酷似。
23層　暗褐色土　ローム粒子混入（均質・少量）。

0　1　2m

24層　黒褐色土　ローム粒子（少量）混入。
25層　暗褐色土　ロームブロック混入。壁の崩壊土。
26層　暗褐色土　ローム粒子混入。
27層　暗褐色土　25層に酷似。
28層　暗褐色土　ローム粒子混入（均質・多量）。
29層　黄褐色土　ロームブロック。壁の崩壊土。

第148図　小林3・4号住居址



第149図　小林３号住居址・竈

小林３号住居址（第148・149図、PL―22）

本住居址は、小林Ⅲ区の北部（Bc，Bd―15，16G）に位置し、４号住居址と南東隅を切る。新旧関係は、本住居址のほうが新しい。

平面形態は、隅丸の正方形もしくは長方形を呈すると思われ、南北4.0mを測るが、西壁が調査区外に位置するため、東西方向の規模は不明である。壁は垂直に立ち上がり、壁高42.9～48.0cmを測る。壁溝は、東壁の竈以北及び北壁に確認でき、幅20.5～31.0cm、深度3.0～14.5cmを測り、断面形状はU字形を呈する。柱穴様ピットは、２個確認できた(深度は、Ｐ１が39.0cm、Ｐ２が36.4cm)。床面は、ほぼ平坦で緩やかに南へ向かって傾斜する。床面の締まりは強くなく、堅緻面も竈燃焼部前面の一部を除いて確認できなかった。貯蔵穴は竈の右側・住居南東隅に付設され、床面から33.0cmの深度を測る。

竈は、東壁の中央南寄りに付設される。袖部は14×33cm大の円礫を暗褐色の粘質土で固定・付設し、扁平な角礫を架梁する。燃焼部は、奥壁に向かい長楕円形を呈し、住居壁外に張りだす。被熱の程度は高く、燃焼部から煙道部にかけて、焼土ブロック・粒子の厚い堆積が確認できた。

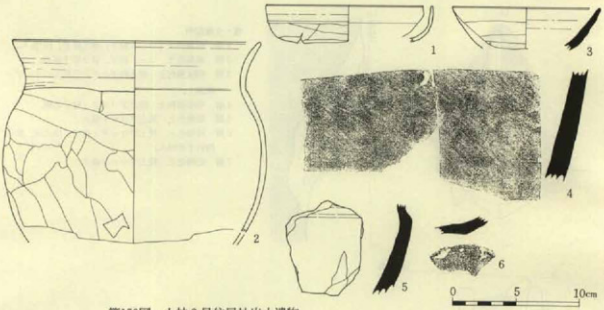
本住居址からの遺物出土は少なく。竈周辺及び竈前面の床面上から土師器・甕及び須恵器・大甕の破片が出土している。

３号住居址出土遺物（第150図、第59表）

１は土師器・杯で覆土中の出土。

２は土師器・甕で竈の前面から出土している。

３～５は須恵器の破片資料である。



第150図　小林３号住居址出土遺物

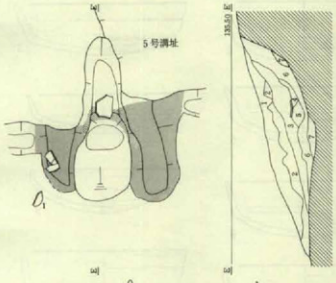
小林４号住居址（第148・151図、PL－23）

本住居址は、小林Ⅲ区の北部（Bc，Bd，Bd－15，16G）に位置し、３号住居址と北西隅で重複する。新旧関係は、本住居址のほうが古い。

平面形態は、正方形を呈すると思われ南北6.3mを測るが、東壁が調査区外に位置するため、東西方向の規模は不明である。壁は垂直に立ち上がり、壁高31.0～42.5cmを測る。壁溝は、調査区内では全周し、幅24.0～37.0cm、深度6.1～12.3cmを測り、断面形状はU字状を呈する。柱穴は、８本確認でき、Ｐ３，Ｐ４，Ｐ６を主柱穴とする（深度は、Ｐ３が44.5cm、Ｐ４が37.9cm、Ｐ６が80.5cm）。床面は、ほぼ平坦であるが締まりは強くなく、明確な堅緻面も確認できなかった。貯蔵穴は竈の右側・住居南東隅に付設されるが、そのほとんどを調査区外に位置する。

竈は、北壁の中央東寄りに付設される。袖部は暗褐色の粘質土で構築する。燃焼部は、奥壁に向かい長楕円形を呈する。被熱の程度は高く、燃焼部から煙道部にかけて、焼土ブロック・粒子の厚い堆積が確認できた。

本住居址からの遺物出土は多く、Ｐ４及びＰ６周辺に集中する傾向を示す。実測個体も多いが、大型の完形個体の出土はなく、破片での資料が多い傾向を示す。



第151図　小林4号住居址・竈

小林4号住居址出土遺物（第152～154図、第60表、PL－80，81）

1～21は土師器・杯。

22は土師器・壺。

23・24は土師器・甕。

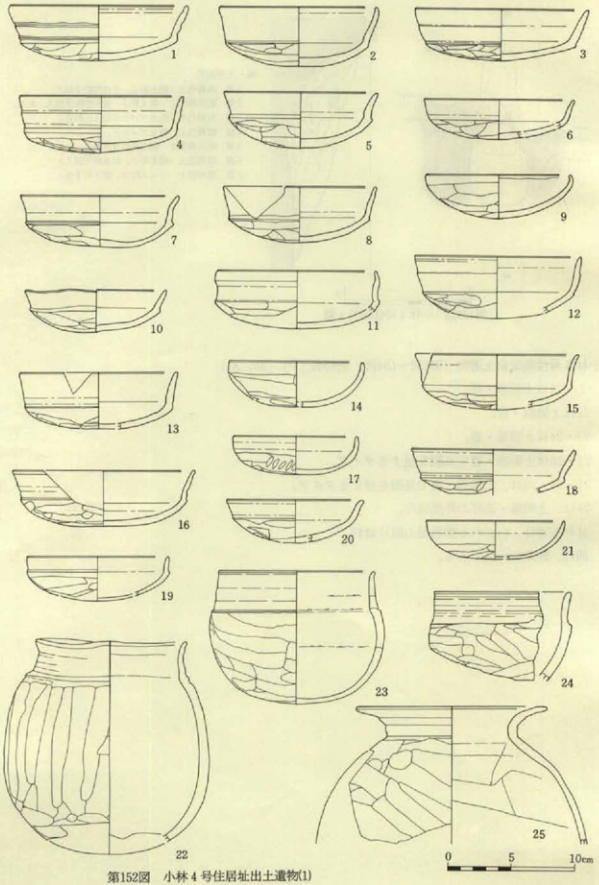
25・26は土師器・甕で丸胴を呈するタイプ。

27・28・30は、土師器・甕で長胴を呈するタイプ。

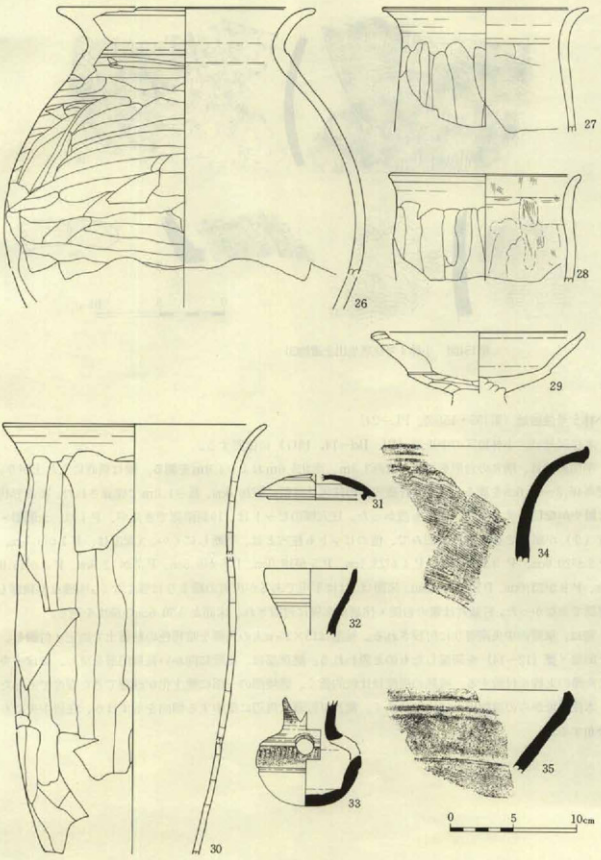
29は、土師器・高杯の杯部破片。

31から38は、いずれも須恵器の破片資料。

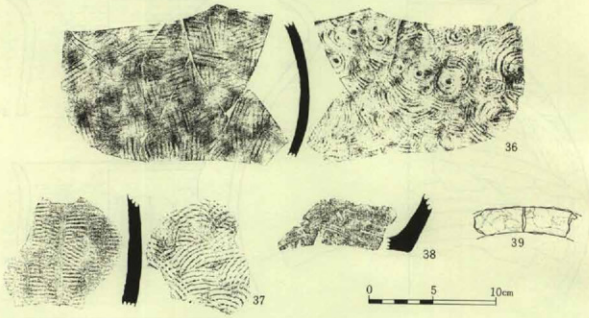
39は、鉄鎌の一部である。



第152図　小林4号住居址出土遺物(1)



第153図　小林４号住居址出土遺物(2)



第154図　小林４号住居址出土遺物(3)

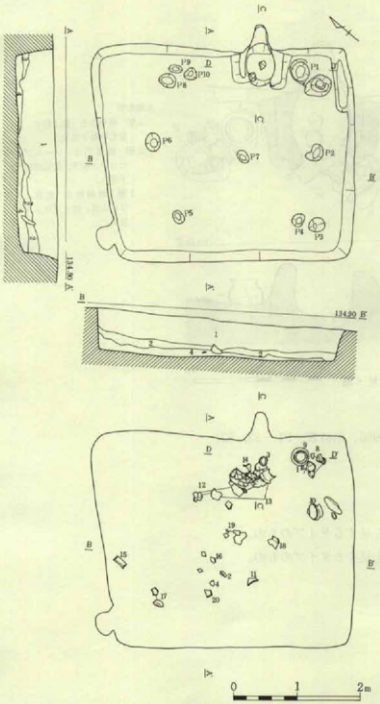
小林５号住居址（第155・156図、PL－24）

本住居址は、小林Ⅲ区の中央部（Bf，Bd－14，15G）に位置する。

平面形態は、隅丸の台形を呈し、東西3.3m、南北3.6mおよび4.0mを測る。壁は垂直に立ち上がり、壁高46.2～63.6cmを測る。壁溝は貯蔵穴南の住居址南壁に幅26.0cm、長さ1.0mで確認された。断面形状は緩やかなU字状を呈し、深度も浅かった。柱穴様のピットは、10個確認できたが、Ｐ１は、土師器・壺（９）が順位で据えられた凹みで、他のピットも柱穴とは、判断しにくい。(深度は、Ｐ１が9.7cm、Ｐ２が20.9cm、Ｐ３が15.2cm、Ｐ４が23.1cm、Ｐ５が18.0cm、Ｐ６が6.5cm、Ｐ７が12.3cm、Ｐ８が15.0cm、Ｐ９が23.0cm、Ｐ10が17.6cm)。床面は、ほぼ平坦であるが床面の締まりは強くなく、明確な堅緻面も確認できなかった。貯蔵穴は竈の右側・住居南東隅に付設され、床面から50.6cmの深度を測る。

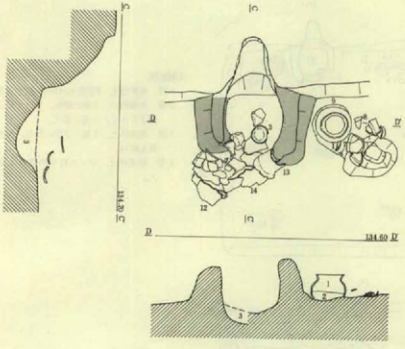
竈は、東壁の中央南寄りに付設される。袖部は15×20cm大の角礫を暗褐色の粘質土で固定・付設し、土師器・甕（12～14）を架梁したものと思われる。燃焼部は、奥壁に向かい長楕円形を呈し、ほぼ中央に角礫の支脚を付設する。被熱の程度は比較的低く、燃焼部の一部に焼土化が確認できた程度であった。

本住居址からの遺物出土は比較的多く。竈及び貯蔵穴周辺に集中する傾向を示すほか、住居中央にも分布する。



土層説明
1層　黒褐色土　FP混入。ローム粒子点在。
2層　黒褐色土　1層に酷似。ローム粒子1層より多く、均質に混入。
3層　黒褐色土　1層・2層に酷似。覆土中最も暗い。
4層　暗褐色土　ローム粒子均質に多量混入。

第155図　小林5号住居址



第156図　小林５号住居址・竈

小林５号住居址出土遺物（第157～159図、第61表、PL－82，83）

１から６は、土師器・杯である。

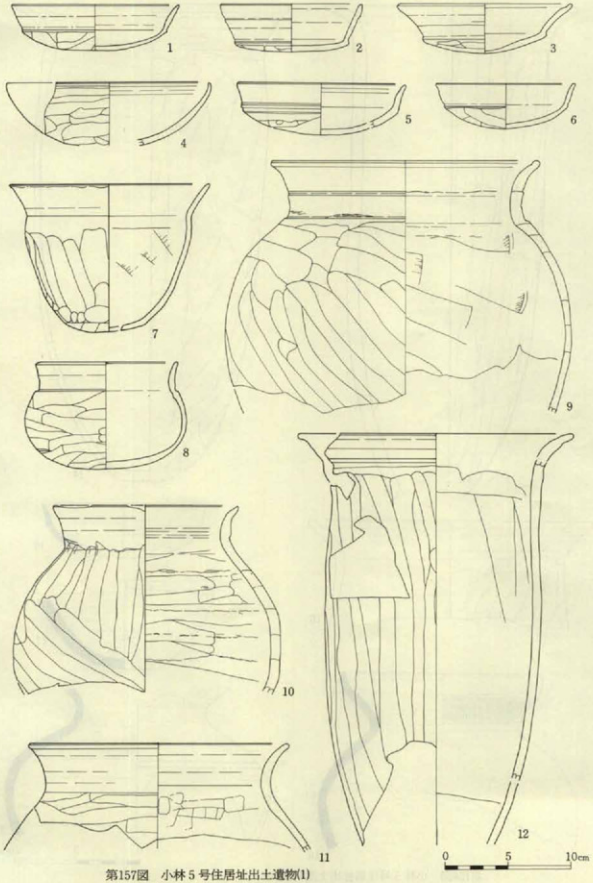
７は、土師器・甑である。

８は、土師器・甕である。

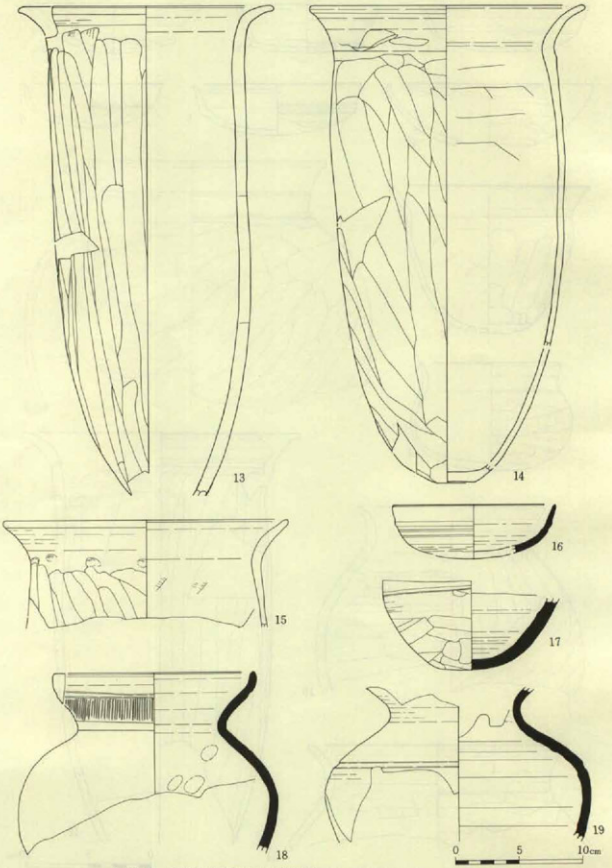
９から11は、土師器・甕で、丸胴を呈するタイプのもの。

12から15は、土師器・甕で、長胴を呈するタイプのもの。

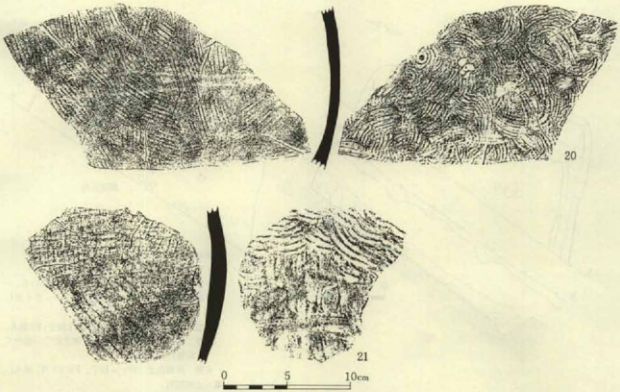
16から21は、須恵器である。



第157図　小林5号住居址出土遺物(1)



第158図　小林５号住居址出土遺物(2)



第159図　小林５号住居址出土遺物(3)

小林６号住居址（第160図、PL－25）

本住居址は、小林Ⅲ区のほぼ中央（Bg，Bh－14，15G）に位置する。

平面形態は隅丸の正方形もしくは長方形を呈し、南北3.4mを測るが、西壁が調査区外に位置するため東西方向の規模は不明である。壁はやや緩やかに立ち上がり壁高は37.5～44.2cmを測る。壁溝は竈以北の東壁及び北壁に検出され、幅21.0～40.0cm、深度9.0～16.0cmを測る。断面形状は緩やかなU字状を呈する。竈の北側では形状が歪む。床面は、ほぼ平坦であるが締まりは強くなく、明確な堅緻面も確認できなかった。ピットは４本確認されたが、いずれも柱穴とは判断しにくい。

貯蔵穴は竈の右側・住居南東隅に付設され、内径15×15cm、床面からの深度37.3cmを測る。また、底部以外を７～40cm程度の扁平な円礫を積み上げて構築した石積の貯蔵穴である。

竈は、東壁の中央やや東寄りに付設される。袖部は暗褐色の粘質土で作られ、燃焼部は奥壁に向かい円形を呈する。左袖前面から扁平な石が出土しており、竈の構築材と推定できる。また、燃焼部中央奥壁寄りに15×25cmの円礫を支脚として据える。

本住居址からの遺物出土は比較的多く、竈前面に集中する傾向を示す。

小林６号住居址出土遺物（第161図、第62表、PL－84）

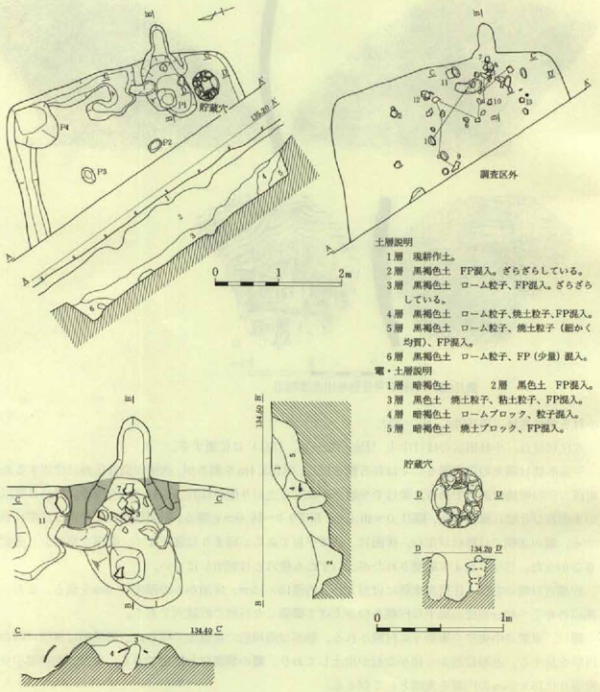
１から７は、土師器・杯で、１，７は内部にヘラミガキを施す。

８は、土師器・椀。

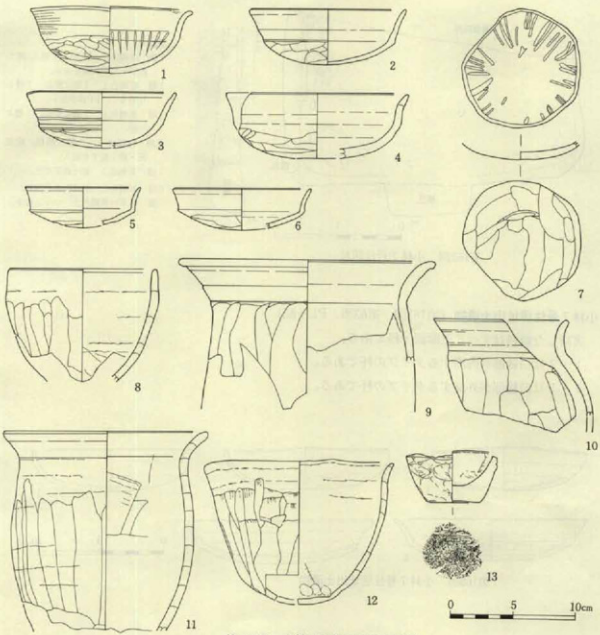
９から11は、土師器・甕で、９，11は、長胴を呈する。

12は、土師器・甑。

13は、手捏ねの土器。



第160図　小林６号住居址



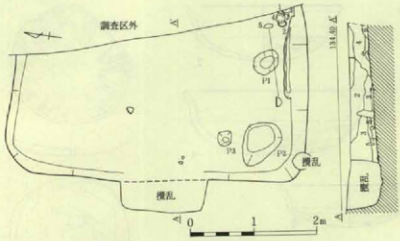
第161図　小林６号住居址出土遺物

小林７号住居址（第162図、PL－25，26）

本住居址は、小林Ⅲ区の南部（Bk，Bl－13G）に位置する。

平面形態は隅丸の正方形もしくは長方形を呈するものと思われ、南北4.8mを測るが、東壁が調査区外に位置するため東西方向の規模は不明である。壁はやや緩やかに立ち上がり、壁高40.1～50.5cmを測る。壁溝は南壁の一部に幅25.0～40.0cm、長さ1.3mで検出した。断面形状はU字状で、深度も浅く、床面より幾分窪む程度である。ピットは３本検出したが、いずれも柱穴とは判断しにくい。床面は、ほぼ平坦で、やや西に傾斜する。竈、貯蔵穴は調査区内では検出されなかった。

本住居址の遺物出土状況は、南壁の調査区内東寄りに集中し、土師器・杯が５点まとまって出土している。



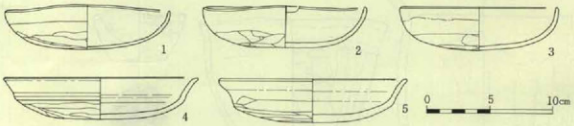
第162図　小林７号住居址

小林７号住居址出土遺物（第163図、第63表、PL—85）

実測した資料はすべて土師器・杯である。

1～3は口縁部が内湾するタイプの杯である。

4・5は口縁部が外反するタイプの杯である。



第163図　小林７号住居址出土遺物

小林９号住居址（第164図、PL—26）

本住居址は、小林Ⅲ区の中央南より（Bj，Bk—13G）に位置するが、そのほとんどを調査区外に位置するため、調査で判明したことは少ない。

第164図　小林９号住居址

覆土中より、古墳時代後期鬼高期に比定できる土師器・杯の破片数点が出土している。

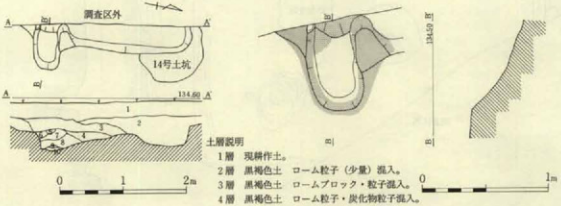
小林12号住居址（第165図、PL－26）

本住居址は、小林Ⅲ区の南部（Bn，Bo－13G）に位置する。

本住居址も竈及び東壁の一部を調査できた程度で、不明な点が多い。

竈は、東壁に付設されるが、どの位置に当るかは、住居南東隅が確認できなかったので不明である。右袖に円礫を暗褐色の粘質土で固定・付設している。燃焼部は奥壁に向かい丸味を帯び、長方形の煙道部に続く。被熱の程度は、燃焼部で比較的高く、焼土の厚い堆積を確認できた。

出土遺物も少なく、造営時期の比定は困難であった。



第165図　小林12号住居址

小林13号住居址（第166図、PL－27）

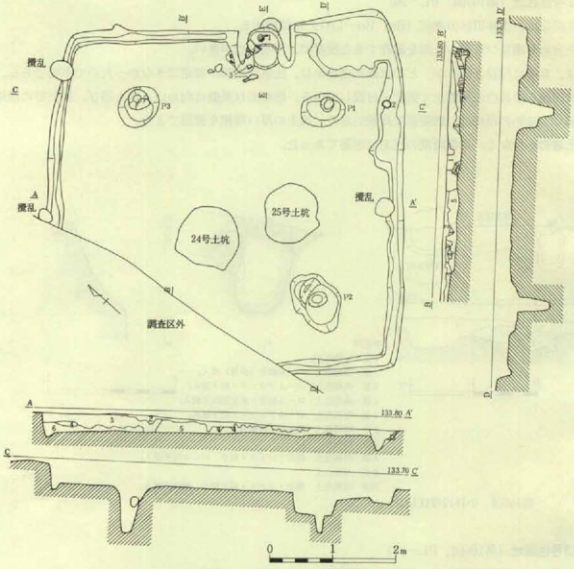
本住居址は、小林Ⅳ区の中央北寄り（Ca，Cb－9～11G）に位置する。

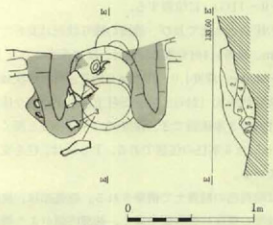
本住居址の位置する小林Ⅳ区は、耕作面が遺構の床面近くまで及び、遺構の残り状況は良好でない。

本住居址の平面形態は、ほぼ正方形で、南北5.3m、東西5.4mを測る。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高10.3～28.1cmを測る。壁溝は全周し、幅16.0～34.0cm、深度4.0～19.4cmを測り、断面形状はU字状を呈する。北東隅では、形状が歪む。床面は、縄文時代土坑（24号土坑、25号土坑）上の貼り床部分で若干凹む以外は、ほぼ平坦でよく締まっている。柱穴は3本確認でき、深度57.7～68.9cmと深く、調査区外に想定できる1本と合わせ、柱間2.3mの整然とした4本柱の住居である。P3には、柱を支えるためと推定できる30cm大のロームブロックが出土している。

竈は、東壁中央やや南寄りに付設される。袖部は暗褐色の粘質土で構築される。燃焼部は、奥壁に向かい丸味を帯びた方形を呈し、47×40cmを測る。被熱の程度は燃焼部で高く、袖部内側がよく焼けている。

本住居址の遺物出土状況は、遺構の保存状況を反映して、南壁中央東よりから、土師器・杯（2）の完形品出土以外は、竈周辺から土師器・台付き甕の脚部（5）、土師器・長胴甕（4）の破片が出土した程度であった。





土層説明

1層　黒褐色土　ロームブロック・粒子混入。焼土粒子点在。
2層　暗褐色土　ロームブロック・粒子、FP混入。
3層　暗褐色土　ロームブロック・粒子混入。
4層　黒褐色土　ロームブロック・粒子、FP混入。
5層　暗褐色土　ロームブロック・粒子、FP混入。
6層　暗褐色土　ロームブロック・粒子混入。焼土粒子点在。
7層　暗紫褐色土　粘質。
8層　暗褐色土　ローム粒子混入。
9層　暗灰褐色土　粘質。
10層　暗褐色土　ロームブロック混入。
11層　暗褐色土　ロームブロック・粒子混入。
12層　暗褐色土　6層に酷似。6層より均質。
13層　暗褐色土　砂質。

竈・土層説明

1層　暗褐色土　ローム粒子、焼土粒子、炭化物粒子混入。砂質。
2層　暗褐色土　ローム粒子、焼土ブロック混入。
3層　暗褐色土　粘質。
4層　暗褐色土　焼土ブロック・粒子混入。
5層　暗褐色土　焼土粒子混入。
6層　暗褐色土　ローム粒子混入。
7層　褐色土　ロームブロック・粒子、焼土粒子混入。

第166図　小林13号住居址

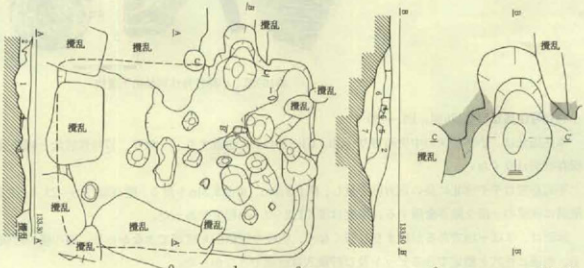
小林13号住居址出土遺物（第167図、第64表、PL－85）

1から3は、土師器・杯である。

4は、口縁部を大きく外反する土師器・甕で長胴を呈するタイプ。

5は、胴部下位から脚部までの土師器・台付き甕の資料。胴部中位から口縁部にかけての形状不明。

第167図　小林13号住居址出土遺物



土層説明

1層　暗褐色土　ローム粒子、焼土粒子、炭化物粒子混入。
2層　暗褐色土
3層　黒褐色土　ロームブロック混入。
4層　暗褐色土　焼土粒子混入。

竈・土層説明

1層　暗褐色土　ローム粒子、焼成灰、焼土粒子混入。
2層　暗褐色土　ローム粒子、焼土粒子混入。
3層　暗褐色土　ロームブロック、焼土粒子混入。
4層　暗褐色土　焼成灰、焼土粒子混入。
5層　暗灰白色粘土層。
6層　暗褐色土　ローム粒子、焼土粒子、粘土粒子混入。
7層　暗褐色土　ロームブロック、焼土ブロック・粒子、炭化物粒子混入。

第168図　小林17号住居址

小林17号住居址（第168図、PL－28）

本住居址は、小林Ⅴ区の中央部（Ch，Ci－15G）に位置する。本住居址周辺の調査区は近年の耕作が遺構面にまで及び遺構の保存状況は良くなかった。

平面形態は、南北に長い隅丸長方形を呈し南北5.0m、東西3.1mを測る。壁高は残存状況の良い西壁南部で13.8cmを測る以外は5cm程度であった。壁溝は西壁・南壁に確認できたが、深度は浅く5cm程度であった。床面は随所で耕作及び木根より攪乱されていた。特に竈から北西は大きく攪乱され旧状を呈していない。柱穴と断定できるピット及び貯蔵穴は検出されたなかった。

竈は、東壁の中央南よりに付設される。保存状況はやはり良くなく、燃焼部脇に焼土の分布と暗褐色の粘質土を確認できる程度であった。

本住居址からの遺物出土は少なくそのほとんどが破片資料である。また保存状況からも原位置を保っているか定かではない。

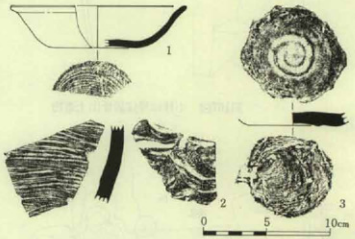
小林17号住居址出土遺物

（第169図、第65表）

すべて須恵器の破片資料である。

1・3は杯の破片である。

2は甕の破片である。



第169図　小林17号住居址出土遺物

小林18号住居址（第170図、PL－29）

本住居址は、小林Ⅴ区の中央西寄り（Ch，Ci－16G）に位置する。やはり、17号住居址と同様遺構の保存状況は良くない。

平面形態はやや南北に長い正方形を呈し、南北3.8m、東西3.3mを測る。壁高は13.9～23.1cmを測る。壁溝は南壁の一部を除き全周する。深度は浅く1.2～2.5cm程度であった。

床面は、ほぼ平坦であるが締まりは強くなく、明確な堅緻面も確認できなかった。西へ僅かに傾斜する。明確に柱穴と断定できるピット及び貯蔵穴は確認できなかった。

竈は、西壁の中央東寄りに付設される。やはり保存状況は良くなく燃焼部とその周辺が確認できるのみであった。

本住居址からの遺物出土は土師器・杯（1，2）を除いてはそのほとんどが破片資料であり、出土量も少ない。また保存状況からも原位置を保っているか定かではない。

土層説明
1層　暗褐色土　ローム粒子混入。砂質。
2層　暗褐色土　ロームブロック・粒子、FP混入（均質）。
3層　黒褐色土　粘質。
4層　暗褐色土　ローム粒子、FP混入（均質）。
5層　暗褐色土　ロームブロック・粒子混入。
6層　暗褐色土　ロームブロック・粒子混入（均質）。

竈・土層説明
1層　黒褐色土　ローム粒子（均質）、焼土粒子（少量）混入。
2層　暗褐色土　ローム粒子、焼土粒子、粘土粒子混入。
3層　暗褐色土　ローム粒子、焼土粒子混入。
4層　黒褐色土　ロームブロック、焼土粒子混入。
5層　暗褐色土　ローム粒子、焼土粒子混入。
6層　暗褐色土　ローム粒子、焼土粒子、焼成灰混入。

第170図　小林18号住居址

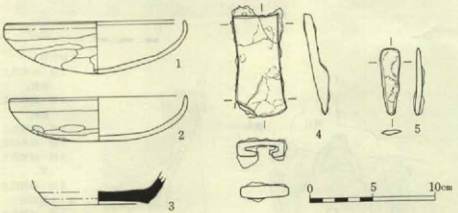
小林18号住居址出土遺物（第171図、第66表、PL—86）

1・2は、土師器・杯で体部が内湾するタイプ。

3は、須恵器の底部破片である。

4は、鉄斧である。

5は、鉄鏃。



第171図　小林18号住居址出土遺物

小林19号住居址（第172図、PL—30）

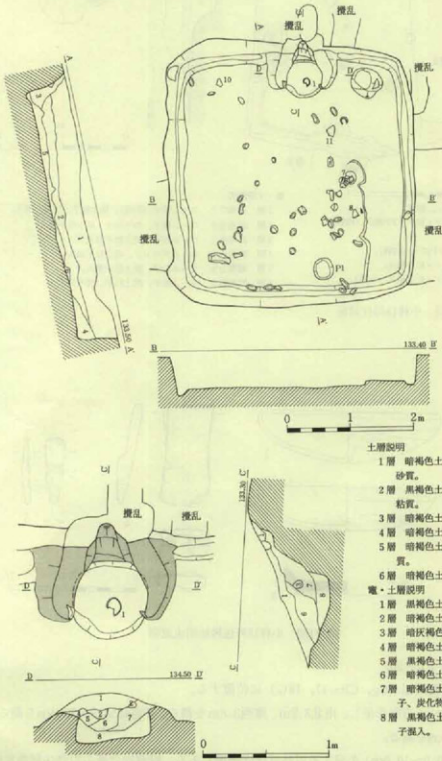
本住居址は、小林V区の最西部（Cg，Ch—17，18G）に位置する。

平面形態はやや南北に長い正方形を呈し、南北3.9m、東西3.8mを測る。壁高は54.9～73.4cmを測る。壁溝は全周し深度1.1～7.6cmを測る。

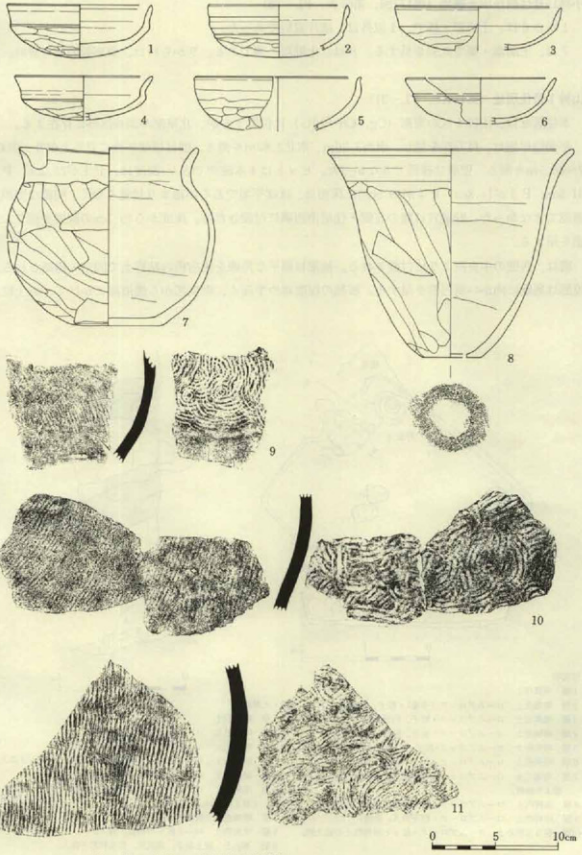
床面は、南西部で段差（6.0～10.0cm）を呈する以外はほぼ平坦である。貯蔵穴は竈の右側住居南東隅に付設され、床面から58.6cmの深度を測る。柱穴は検出されなかった。

竈は、東壁の中央やや東寄りに付設される。袖部は暗褐色の粘質土で作られ、燃焼部は円形を呈し、62×60cmを測る。

本住居址からの遺物出土は破片資料及び礫がほとんどであるが多い。礫については、床面から20点以上出土しているが、焼編み石と断定できるものは出土しておらず、その性格については不明である。



第172図　小林19号住居址



第173図　小林19号住居址出土遺物

小林19号住居址出土遺物（第173図、第67表、PL—86）

1から6は、土師器・杯で、1以外は、破片資料であった。

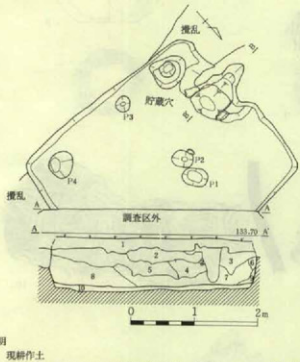
7は、土師器・甕で丸胴を呈する。8は、土師器・甑である。9から11は、須恵器の破片資料。

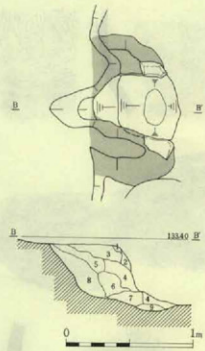
山神1号住居址（第174図、PL—31）

本住居址は、山神Ⅰ区の東部（Cg，Ch—19G）に位置するが、北東部が調査区外に存在する。

平面位形態は、長方形を呈し、東西3.20m、南北2.80mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高40.7～46.5mを測る。壁溝は確認できなかった。ピットは4本確認できた(深度は、P1が21.2cm、P2が31.5cm、P3が14.8cm、P4が39.5cm)。床面は、ほぼ平坦であるが締まりは強くなく、明確な堅緻面も確認できなかった。貯蔵穴は竈の左側・住居南西隅に付設される。床面から49.7cmの深度を測り二段構造を呈する。

竈は、西壁の中央南よりに付設される。袖部は扁平な角礫を灰白色の粘質土で固定・構築される。燃焼部は奥壁に向かい楕円形を呈する。被熱の程度はやや高く、燃焼部から煙道部にかけて、焼土粒子の





土層説明

1層　現耕作土

2層　暗褐色土　ロームブロック（多量）・粒子、FP混入。

3層　黒褐色土　ロームブロック・粒子、FP混入。

4層　暗褐色土　ロームブロック・粒子、FP混入。

5層　暗褐色土　ロームブロック・粒子、FP混入。2層より暗い。

6層　暗褐色土　ロームブロック・粒子（多量）混入。

7層　暗褐色土　ロームブロック・粒子混入。小円礫点在。4・5層より砂質。

8層　暗褐色土　ロームブロック・粒子、焼土粒子、FP混入。

9層　暗褐色土　ロームブロック・粒子混入。砂質。

10層　掘り方埋め土。ロームブロック・粒子と暗褐色土の混土層。

竈・土層説明

1層　暗褐色土

2層　暗褐色土　ローム粒子、炭化物粒子混入。

3層　暗褐色土　ローム粒子、炭化物粒子混入。

4層　暗褐色土　ロームブロック・粒子、灰白色粘土ブロック混入。

5層　暗褐色土　ローム粒子、焼土粒子（均質）混入。

6層　暗褐色土　ロームブロック・粒子、灰白色粘土ブロック混入。4層より暗い。

7層　暗褐色土　焼成灰混入。

8層　暗褐色土　ローム粒子（均質）混入。

9層　褐色土　焼土粒子、焼成灰、炭化物粒子混入。

第174図　山神1号住居址

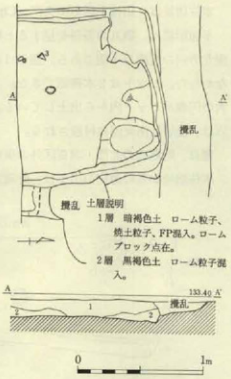
山神２号住居址（第175図、PL－31）

本住居址は、山神Ⅰ区の中央部（Ci－21G）に位置し、南部は調査区外に存在する。

平面形態は、隅丸の方形を呈するものと思われ、東西方向2.62mを測るが、南北方向の規模は不明である。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高17.0～31.1cmを測る。壁溝は全周するものと思われるが、北西隅・北東隅で軟化し、不明瞭。幅17.0～23.0cm、深度5.6cmを測り、断面形状は、U字状を呈する。床面は、ほぼ平坦であるが、締まりは強くない。ピット及び貯蔵穴は確認できなかった。

竈は、東壁に付設されていたものと思われるが、攪乱によって破壊されており、構造等は不明な点が多い。

遺物の出土は少なく、破片資料がそのほとんどであった。



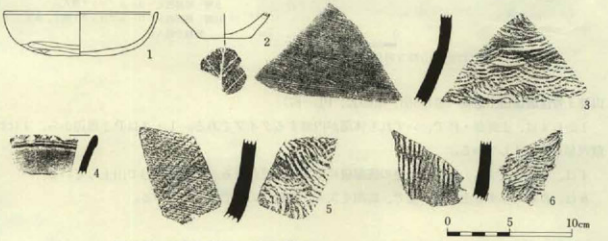
第175図　山神２号住居址

山神２号住居址出土遺物（第176図、第68表、PL－86）

１は、土師器・杯の破片で、体部が内湾し、底部周辺をヘラケズリによって調整する。

２は。土師器・甕の底部破片で、木葉痕が確認できる。

３から６は、須恵器の破片資料である。



第176図　山神２号住居址出土遺物

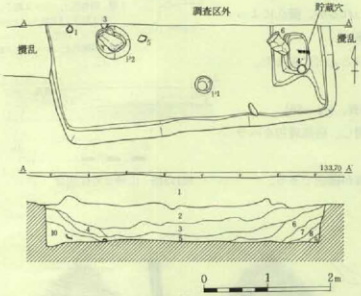
山神３号住居址（第177図、PL—32）

本住居址は、山神Ⅰ区の中央部（Ch—21，22G）に位置するが、北部大半が調査区外に存在する。

平面形態は、隅丸の方形を呈すると思われ、東西4.34mを測るが、北部が調査区外に位置するため、南北方向の規模は不明である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高58.6～69.1cmを測る。壁溝は確認できなかった。ピットは２本確認できた。Ｐ２が主柱穴の１本であると思われ、深度49.9cmを測る。約40cm大の円礫がピット内から出土している。床面は、ほぼ平坦であるが、壁際に向かいやや傾斜する。貯蔵穴は、住居址南東部に付設される。

竈は、貯蔵穴の北部・調査区外の東壁に付設されているものと思われる。

本住居址からの遺物の出土は、貯蔵穴・Ｐ２周辺の集中する傾向を示す。



土層説明
1層　現耕作土。
2層　黒褐色土　ローム粒子、焼土粒子、FP混入。
3層　暗褐色土　ロームブロック・粒子、焼土粒子、FP混入
4層　暗褐色土　ローム粒子を多量に均質混入。
5層　黒褐色土　ローム粒子、炭化物粒子、FP混入。
6層　黒褐色土　ローム粒子、炭化物粒子、焼土粒子、FP混入。ざらざらしている。
7層　黒褐色土　ロームブロック・粒子、炭化物粒子混入。
8層　黒褐色土　ロームブロック(多量)、炭化物粒子、焼土粒子混入。
9層　暗褐色土　ロームブロック混入。
10層　黒褐色土　ロームブロック・粒子、炭化物粒子混入。

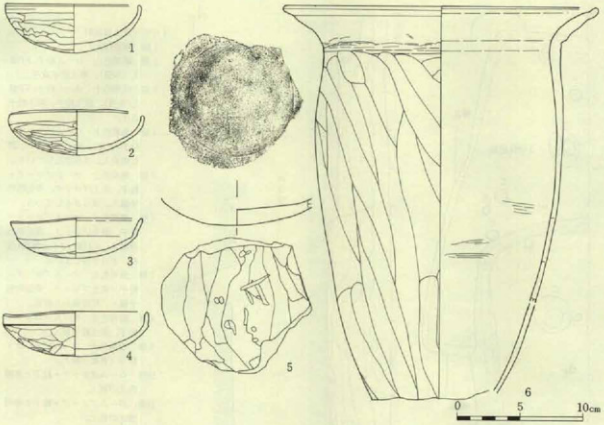
第177図　山神３号住居址

山神３号住居址出土遺物（第178図、第69表、PL—87）

１から４は、土師器・杯で、いずれも体部が内湾するタイプである。１・３はＰ２周辺から、４は貯蔵穴脇から出土している。

４は、丸底を呈するの土師器・甕の底部破片であると思われる。Ｐ２の東脇で出土している。

６は、長胴を呈する土師器・甕で、底部を欠く。貯蔵穴の脇で出土している。



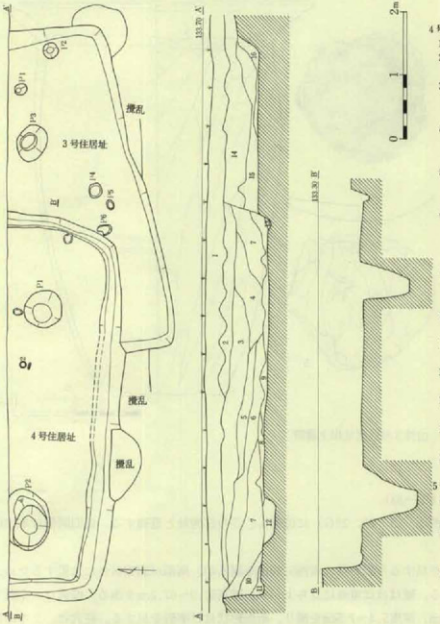
第178図　山神３号住居址出土遺物

山神４号住居址（第179図、PL－33）

本住居址は、山神Ⅰ区の西部（Ci－22，23G）に位置し、５号住居址と重複する。新旧関係は本住居址のほうが新しい。

平面形態は、隅丸の方形を呈すると思われ、東西5.90mを測るが、南部が調査区外に位置するため、南北方向の規模は不明である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高57.9～67.2cmを測る。壁溝は、全周すると思われ、幅17.0～40.0cm、深度5.4～7.5cmを測り、断面形状はU字形を呈する。柱穴は、２本確認できた（深度は、Ｐ１が72.3cm、Ｐ２が81.8cm）。床面は、ほぼ平坦である。竈・貯蔵穴は、調査区内では確認できなかった。

本住居址からの遺物の出土は、少なく、破片資料が多い。Ｐ１の東の床面から土師器・杯（２）が出土している。



第179図　山神４・５号住居址

山神４号住居址出土遺物（第180図、第70表、PL－87）

１から４は、土師器・杯である。

５は、胴部が丸胴を呈する土師器・甕である。

６・８・９は、長胴を呈する土師器・甕の口縁部破片である。

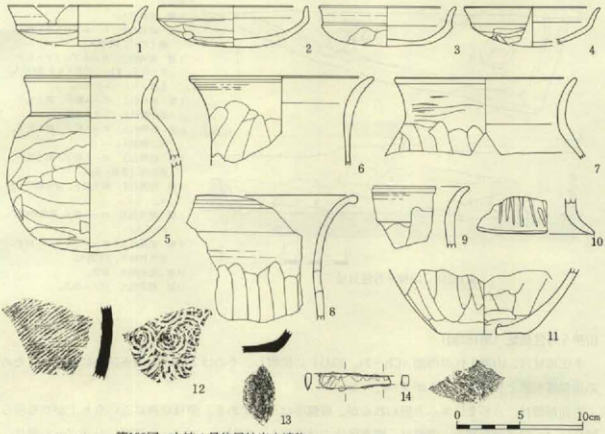
７は、胴部が丸胴を呈するものと思われる土師器・甕の口縁部から頸部の破片資料である。

10は、土師器・台付き甕の脚部破片である。

11は、土師器・甑の破片資料。

12・13は、須恵器の破片資料である。

14は、刀子で先端部及び基部の一部を欠く。



第180図　山神４号住居址出土遺物

山神５号住居址（第179図、PL－33）

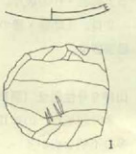
本住居址は、山神Ⅰ区の西部（Ci－23，24G）に位置し、４号住居址に切られる。

平面形態は、方形を呈すると思われ東西5.30mを測るが、南部が調査区外に位置するため南北方向の規模は不明である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高39.8～42.2cmを測る。壁溝はなかった。ピットは６本確認できたが、Ｐ３が主柱穴の１本であると思われる。床面はほぼ平坦である。竈・貯蔵穴は調査区内では確認できなかった。

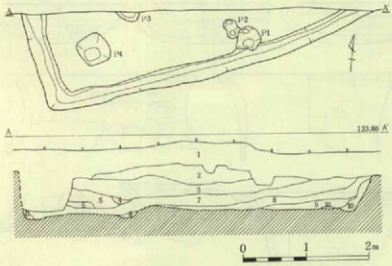
本住居址からの、遺物の出土は少なく、実測資料は外面をヘラケズリにより調整する土師器・杯の破片のほかはなかった。

山神５号住居址出土遺物（第181図、第71表）

外面をヘラケズリにより調整する土師器・杯の底部の破片資料である。



第181図
山神５号住居址出土遺物



土層説明
1層　現耕作土。
2層　暗褐色土　ロームブロック・粒子、焼土粒子、FP混入。
3層　暗褐色土　ロームブロック・粒子、焼土粒子、FP(小児拳大もあり)混入。2層よりローム少ない。
4層　黒褐色土　ローム粒子、焼土粒子、炭化物混入（ラミナを呈す）。
5層　暗褐色土　ローム粒子、焼土粒子、炭化物混入。
6層　暗褐色土　ローム粒子、焼土粒子、炭化物（多量）混入。
7層　暗褐色土　粘土粒子、炭化物粒子混入。
8層　暗褐色土　ローム粒子、炭化物粒子、FP混入。
9層　暗褐色土　ロームブロック・粒子、炭化物粒子、FP混入。
10層　暗褐色土　砂質。
11層　暗褐色土　ローム混入。

第182図　山神６号住居址

山神６号住居址（第182図）

本住居址は、山神Ⅰ区の西部（Ch—24，25G）に位置し、そのほとんどが調査区外に位置するためその規模等判然としないところが多い。

平面形態は、方形を呈すると思われるが、規模等は不明である。壁は垂直に近い立ち上がりを示し、壁高56.4～72.5cmを測る。壁溝は、調査区内では全周し、幅24.0～28.0cm、深度1.2～6.7cmを測り、断面形状はU字状を呈する。ピットは４本確認でき、Ｐ４が主柱穴の１本であると思われる。竈・貯蔵穴は調査区内では確認できなかった。

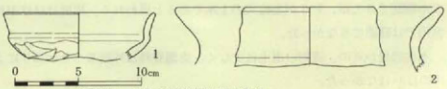
本住居址からの遺物の出土は少なく、実測資料も覆土中からの出土であった。

山神６号住居址出土遺物

（第183図、第72表）

１は、口縁部が外反する土師器・杯の破片。

２は、土師器・甕の口縁部破片。

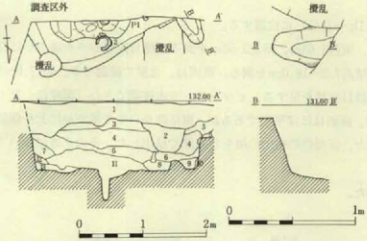


第183図　山神６号住居址出土遺物

山神９号住居址（第184図、PL—34）

本住居址は、山神Ⅱ区の東部（Dp—17G）に位置するが、調査区外にほとんどが位置するため、規模等の不明な点が多い。

平面形態は、隅丸の方形を呈するものと思われるが、規模は不明である。壁は垂直に立ち上がり、壁高52.8～56.5cmを測る。壁溝は確認できなかった。ピットは１本確認できた。床面はＰ１周辺で軟化しているが、ほかはほぼ平坦である。



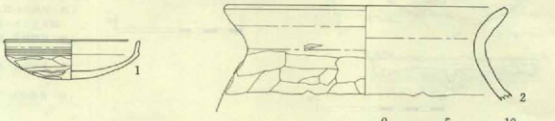
土層説明
1層　現耕作土。
2層　近年の溝による撹乱土。
3層　黒褐色土　ローム粒子（少量）、FP点在。
4層　暗褐色土　ロームブロック・粒子混入。
5層　暗褐色土　焼土粒子混入。
6層　黒褐色土　焼土ブロック・粒子、ローム粒子混入。
7層　暗褐色土　ロームブロック・粒子、黒褐色粘質土ブロック、FP混入。
8層　灰褐色土　ローム粒子（微量）、焼土粒子（微量）混入。粘質。
9層　黒褐色土　ローム粒子（少量）混入。
10層　暗褐色土　焼土粒子混入。
11層　黒褐色土　ロームブロック、FP混入。
12層　黒褐色土　ロームブロック・粒子、FP混入。
13層　ロームブロック・粒子と暗褐色土の混土。

第184図　山神９号住居址

山神９号住居址出土遺物（第185図、第73表、PL－88）

１は、土師器・杯。

２は、土師器・甕の口縁部から頸部の資料。



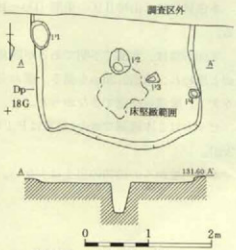
第185図　山神９号住居址出土遺物

山神10号住居址（第186図、PL－34）

本住居址は、山神II区の東部（Do，Dp－18G）に位置し、南部は調査区外に位置する。

平面形態は、北壁が歪む不正形を呈する。東西方向5.25ｍを測る。壁はやや緩やかに立ち上がり壁高5.5～8.1cmを測る。壁溝は確認できなかった。ピットは４本確認できた。床面は、ほぼ平坦であり、中央に堅緻部分を確認した。竈・貯蔵穴も確認できなかった。

11号住居址、12号住居址とともに、住居址としたが住居址である要素のいくつかを欠く。



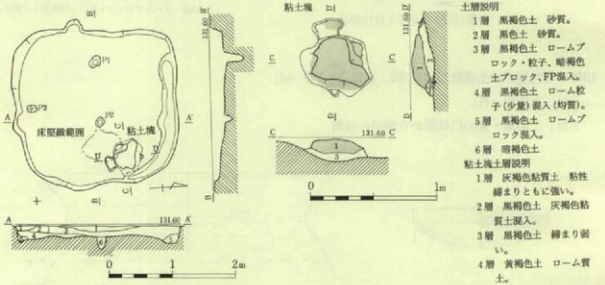
第186図　山神10号住居址

山神11号住居址（第187図、PL—35）

本住居址は、山神Ⅱ区の東部（Do，Dp—19G）に位置する。

平面形態は、歪な隅丸長方形を呈し、東西2.63m、南北2.50mを測る。壁は東壁がやや緩やかに立ち上がるほかはほぼ垂直に立ち上がり、壁高7.2～19.0cmを測る。壁溝は、北壁で確認でき、幅17.0～33.0、深度8.7～10.0cmを測り、断面形状はU字状を呈する。ピットは、3本確認できた（深度は、P 1が26.1cm、P 2が17.3cm、P 3が27.1cm）。床面はほぼ平坦であるが、東に向かいやや緩やかに上り傾斜を示し、堅緻面を東部で確認できた。また、灰褐色の粘土の塊を北東部で検出した。その正確については不明である。

本住居址からの遺物の出土はなかった。



第187図　山神11号住居址

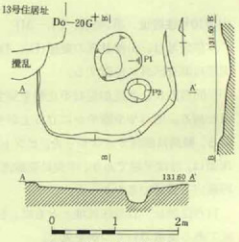
山神12号住居址（第188図、PL—35）

本住居址は、山神Ⅱ区の東部（Do—19，20G）に位置する。

平面形態は、北部で不明であるが隅丸の方形を呈するものと思われ、東西2.20mを測る。壁の立ち上がりは明確さを欠く。壁溝は確認できなかった。

ピットは2本確認できた（深度はP 1は3.7cm、P 2は19.2cm）。

本住居址からの遺物の出土は少ない。

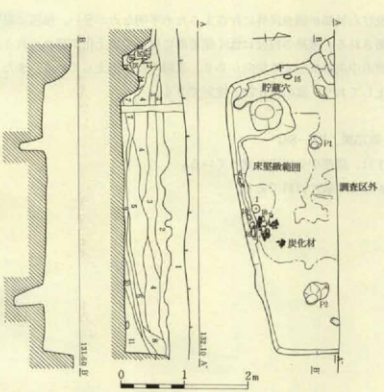


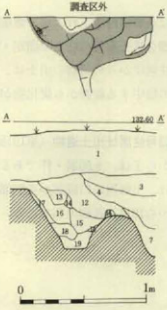
第188図　山神12号住居址

山神12号住居址出土遺物（第189図、第74表）

実測した資料は須恵器の破片のみであった。

第189図　山神12号住居址出土遺物





土層説明　※12層～19層は竈覆土。

1層　現耕作土
2層　黒褐色土　ローム粒子、炭化物粒子、焼土粒子、FP混入（均質）。
3層　黒褐色土　2層に酷似。2層よりローム粒子多い。
4層　黒褐色土　ロームブロック・粒子、FP混入（均質）。焼土ブロック点在。
5層　黒褐色土　ロームブロック・粒子、FP混入（不均質）。焼土粒子点在。
6層　黒褐色土　ロームブロック・粒子、FP混入（均質）。
7層　暗褐色土　ローム粒子、粘土粒子、焼土粒子、炭化物、FP混入（不均質）。
8層　暗褐色土　ロームブロック・粒子、FP混入。ざらざらしている。
9層　黒褐色土　ロームブロック・粒子、FP混入（不均質）。
10層　黒褐色土　ロームブロック・粒子、FP、焼土粒子（少量）混入（不均質）。
11層　暗褐色土　ロームブロック・粒子、焼土粒子、炭化物粒子混入（均質）。
12層　暗褐色土　焼土粒子、粘土粒子混入。
13層　焼土ブロック・粒子と暗褐色土の混土。
14層　暗褐色土　ロームブロック混入。
15層　暗褐色土　ローム粒子（少量）混入（不均質）。
16層　暗灰褐色土　ローム粒子（微量）、焼土粒子、粘土粒子混入。
17層　暗褐色土　粘土粒子混入（均質）。
18層　暗褐色土　焼土ブロック・粒子混入（不均質）。
19層　暗褐色土　焼土粒子（少量）混入（不均質）。

第190図　山神13号住居址

山神13号住居址（第190図、PL—36）

本住居址は、山神Ⅱ区の東部（Dn，Do—20，21G）に位置する。北部の大半は調査区外に位置する。

平面形態は、隅丸の方形を呈すると思われ、東西4.30mを測るが、北部が調査外に位置するため、南北方向の規模は不明である。壁は垂直に立ち上がり、壁高41.6～54.1cmを測る。壁溝は、南壁の西部に確認でき、幅17.0～25.0cm、深度2.7～7.4cmを測り、断面の形状はU字形を呈する。ピットは調査区内では、2本確認できた（深度はP 1が36.3cm、P 2が45.6cmを測る）。床面は、ほぼ平坦で堅緻面の確認も貯蔵穴の東部で確認できた。貯蔵穴は竈の左側・住居南西隅に付設され、床面からの深度58.6cmを測る。

竈は西壁に付設されるが、燃焼部及び右袖部が調査区外に存在するため不明な点が多い。袖部は扁平な円礫を暗灰褐色の粘土で固定・構築される。被熱の程度は低く煙道部の奥部で焼土化が認められる。

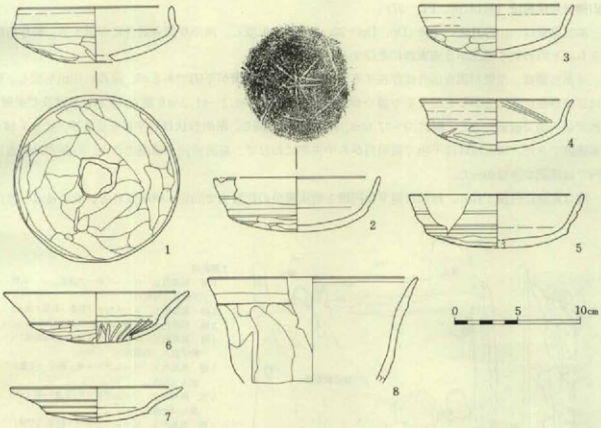
本住居址からの遺物の出土は、南壁の中央に集中する傾向があり、菰編み石が出土している。また、遺物の集中する範囲から炭化物が出土しており、菰の炭化物と推定できる。

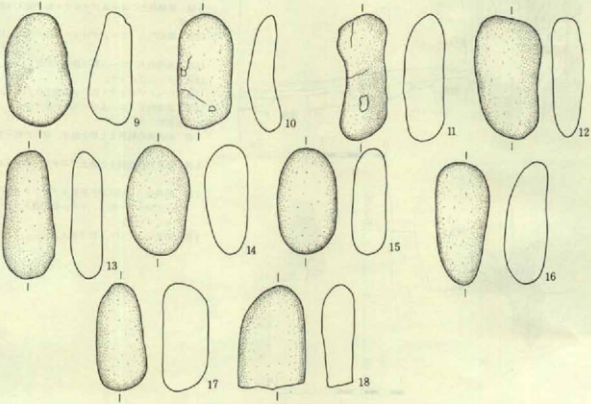
山神13号住居址出土遺物（第191図、第75表、PL—88）

1から7は、土師器・杯である。1は、底部中央に穴を穿っている。

8は、土師器の口縁部から胴部にかけての破片資料である。

9から18は、菰編み石である。





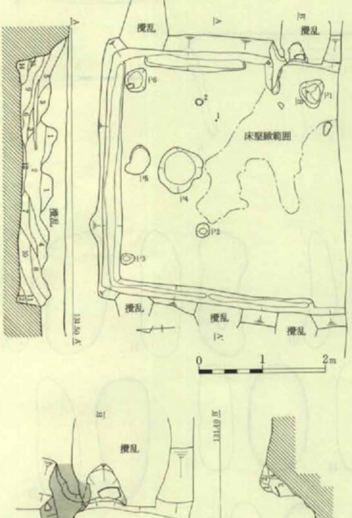
第191図　山神13号住居址出土遺物

山神14号住居址（第192図、PL—37）

本住居址は、山神II区の中央（Do，Dp—22，23G）に位置し、南部を調査区外に位置する。耕作に伴うものと思われる攪乱が3条東西に走行する。

平面形態は、南壁が調査区外に存在するため南北方向の規模が不明であるが、東西4.10mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり上位でやや緩やかに傾斜する。壁高66.2～81.2cmを測る。壁溝は北壁及び東壁・西壁の一部で確認できた。幅21.0～37.0cm、深度9.0cmを測る。断面形状はU字状を呈する。ピットは6本確認できた。床面はほぼ平坦で竈前面から中央部にかけて、堅緻範囲が確認できた。貯蔵穴は調査区内では確認できなかった。

竈は東壁に付設される。袖部は扁平な円礫を暗灰褐色の粘質土で固定・構築される。右の袖は、耕作



土層説明
1層　暗褐色土　ロームブロック点在。ローム粒子混入（均質）。
2層　黒褐色土　ローム粒子（中量、均質）混入。
3層　黒褐色土　2層に酷似。2層より明るい。
4層　黒褐色土　ロームブロック（φ20mm程度）・粒子混入（均質）。
5層　黒褐色土　ロームブロック・粒子（中量）混入（均質）。
6層　黒褐色土　ロームブロック（少量）・粒子（中量）、FP混入。
7層　黒褐色土　ロームブロック・粒子（中量）混入。
8層　黒褐色土　ロームブロック・粒子混入。
9層　黒褐色土　ロームブロック・粒子混入（均質）。
10層　黒褐色土　ロームブロック・粒子混入（均質）。
11層　黒褐色土　ローム粒子混入（均質）。
12層　ロームブロック。
13層　ロームブロック・粒子と暗褐色土の混土。
14層　黒褐色土　ロームブロック・粒子混入。

竈・土層説明
1層　暗灰褐色粘質土と焼土粒子、炭化物粒子混土。
2層　暗灰褐色粘質土と焼土ブロック・粒子の混土。
3層　暗褐色土　暗灰褐色粘質土ブロック・粒子、焼土ブロック・粒子、ローム粒子混入。ざらざらしている。
4層　暗褐色土　ローム粒子混入。

第192図　山神14号住居址

の際に袖石を抜きとられたものと推定できる（P１は袖石の抜き取り痕）。燃焼部は奥壁に向かい長楕円形を呈するものと思われる。

本住居址からの遺物の出土は、P４の南東約30cmと床面直上で、耳環が出土している。全体的に出土量は少なく、破片資料が多い。

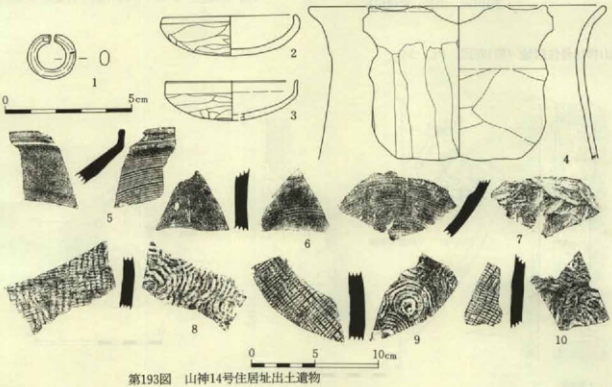
山神14号住居址出土遺物（第193図、第76表、PL－88）

１は、耳環である。

２・３は、土師器・杯である。

４は、長胴を呈するものと思われる土師器・甕の口縁部から頸部の破片資料である。

５から10は、須恵器の破片資料である。



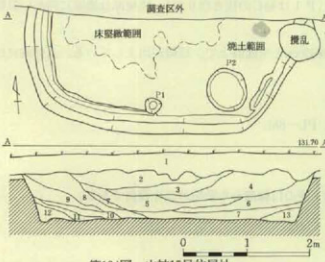
第193図　山神14号住居址出土遺物

山神15号住居址（第194図、PL－38）

本住居址は、山神II区の中央（Dn，Do－23，24G）に位置し、北部が調査区外に位置する。

平面形態は、各辺が弧状描く方形を呈するものと思われ、東西3.50mを測る。壁はやや緩やかな立ち上がりを呈し上位で緩やかに傾斜する。壁高66.2～81.2cmを測る。壁溝は、西壁及び南壁・東壁の一部で確認でき、幅21.0～37.0cm、深度0.9～2.5cmを測る。断面形状はU字状を呈する。ピットは２本確認でき、深度はP１が9.3cm、P２が7.3cmを測る。床面はほぼ平坦で中央で堅緻範囲が確認できた。東部に焼土が確認できた。竈・貯蔵穴は調査区内では確認できなかった。覆土の状況は全体的にロームブロック・粒子を多量に含む。小林２号住居址と同傾向を示す。

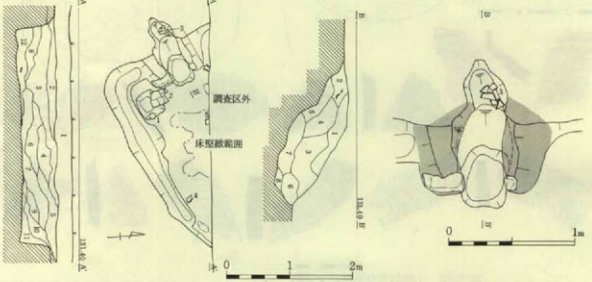
本住居址からは遺物の出土はなかった。



土層説明
1層　現耕作土。
2層　暗褐色土　ロームブロック・粒子、FP混入（均質）。炭化物粒子点在。
3層　暗褐色土　ロームブロック・粒子、FP混入（均質）。
4層　黒褐色土　ロームブロック・粒子、FP混入（均質）。焼土粒子点在。
5層　暗褐色土　ロームブロック・粒子、FP混入（均質）。
6層　暗褐色土　ロームブロック（多量）・粒子、FP混入（均質）。
7層　暗褐色土　6層に酷似。6層よりやや明るい。
8層　暗褐色土　ロームブロック（少量）・粒子、FP混入。
9層　暗褐色土　ロームブロック・粒子、FP混入。炭化物粒子点在。
11層　黒褐色土　ロームブロック・粒子混入。
12層　暗褐色土　ロームブロック・粒子混入。FP点在。
13層　黒褐色土　ロームブロック・粒子、FP混入。

第194図　山神15号住居址

山神16号住居址（第195図、PL—38）



土層説明
1層　現耕作土
2層　暗褐色土　ローム粒子（少量）、FP混入。
3層　暗褐色土　ローム粒子、炭化物粒子、粘土粒子、FP混入。
4層　暗褐色土　ロームブロック・粒子、FP混入（不均質）。
5層　暗褐色土　ロームブロック・粒子（少量）、FP混入（均質）。焼土粒子点在。
6層　暗褐色土　ロームブロック・粒子、FP混入（均質）。
7層　暗褐色土　ロームブロック（中量）・粒子、焼土粒子、FP混入（不均質）。
8層　暗褐色土　ローム粒子、FP混入。焼土粒子点在。
9層　黒褐色土　ローム粒子（微量）、FP混入（均質）。
10層　黒褐色土　ローム粒子（少量）、FP混入（均質）。
11層　暗褐色土　ローム粒子（多量）、FP混入（均質）。
12層　暗褐色土　ローム粒子（微量）、粘土粒子、焼土ブロック・粒子混入。

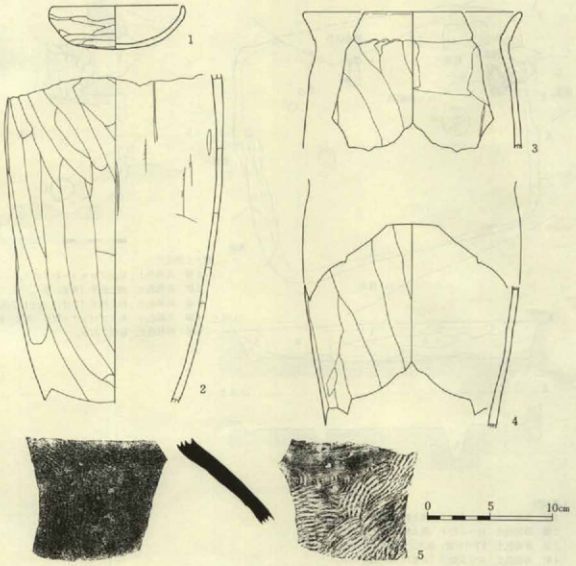
竈・土層説明
1層　暗褐色土　炭化物混入。焼土粒子、粘土粒子点在。
2層　暗褐色土　焼土ブロック・粒子（多量）混入（均質）。
3層　暗褐色土　粘土粒子、炭化物粒子混入（均質）。焼土粒子点在
4層　暗灰褐色粘土（締まり強い）ブロックと暗褐色土の混土。
5層　暗褐色土　ローム粒子、焼土粒子、粘土ブロック混入。
6層　暗褐色土　粘土粒子、炭化物粒子、焼土粒子混入（ラミナを呈する）。
7層　暗褐色土　炭化物粒子、焼土粒子（多量）混入（均質）。
8層　褐色土　焼土ブロック・粒子（多量・均質）混入。

第195図　山神16号住居址

本住居址は、山神Ⅱ区の中央（Dn－24G）に位置し、北部が調査区外に位置する。

平面形態は、隅丸の方形を呈するものと思われるが、規模等は不明である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高43.1～55.4cmを測る。壁溝は南壁で確認でき、幅27.0～36.0cm、深度5.5～5.7cmを測る。断面形状はU字状を呈する。床面はほぼ平坦で中央部で堅緻範囲を確認できた。貯蔵穴は、竈左側の住居址南西隅に付設され、深度43.5cmを測る。。

竈は西壁に付設されるが、袖部は扁平な円礫を暗灰褐色の粘土で固定・構築する。燃焼部は、奥壁に向かって長楕円形を呈する。被熱の程度は比較的低い。



第196図　山神16号住居址出土遺物

山神16号住居址出土遺物（第196図、第77表、PL－88）

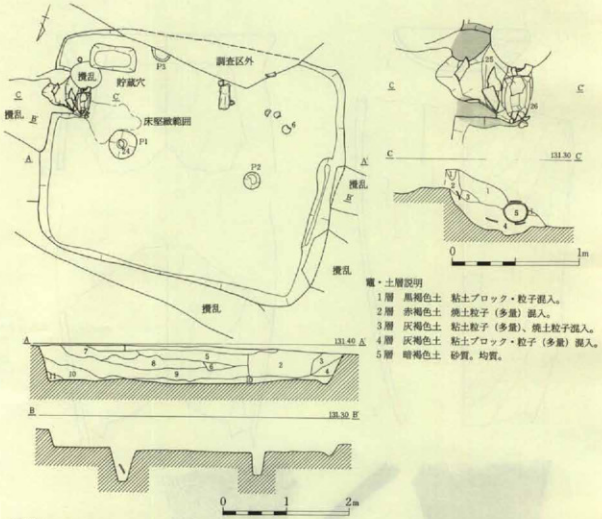
1は、土師器・杯である。

2から4は、土師器・甕で、長胴を呈する。5は、須恵器の破片資料である。

山神17号住居址（第197図、PL—39）

本住居址は、山神Ⅱ区の中央（Do—24，25G）に位置する。南壁の一部が調査区外にある。

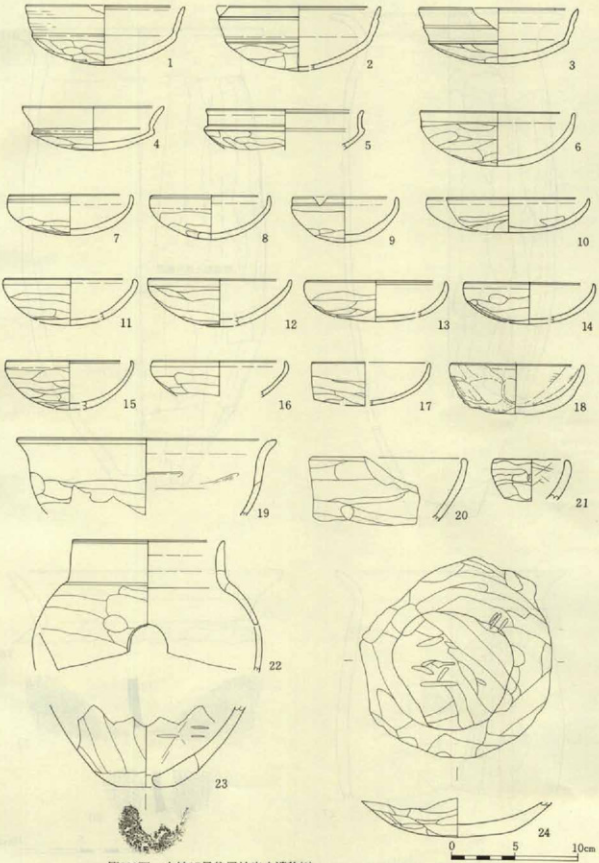
平面形態は、長方形を呈し、東西4.20m、南北3.30mを測る。壁は、やや緩やかに立ち上がり、壁高48.7～71.0cmを測る。壁溝は、西壁の一部に確認でき、幅30.0cm、深度5.8cmを測る。断面形状はU字状を呈する。ピットは、3本確認でき住居の長軸方向に2本並ぶ(深度は、P1が49.6cm、P2が36.2cm)。床面は、ほぼ平坦で竈前面に竪緻範囲を認める。貯蔵穴は、竈の右側・住居南東隅に付設され深度42.1



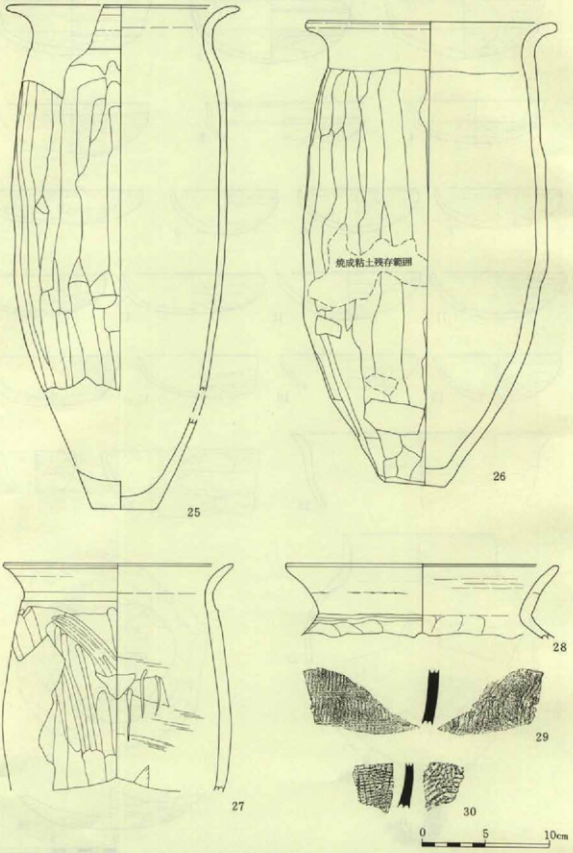
土層説明

1層　黒褐色土　ローム粒子、焼土粒子、FP（均質）混入。
2層　黒褐色土　ローム粒子、焼土粒子、FP（不均質）混入。
3層　黒褐色土　FP（少量）混入。炭化物粒子点在。
4層　黒褐色土　ローム粒子（少量）、焼土粒子点在。
5層　暗褐色土　ローム粒子、焼土粒子、炭化物粒子、FP混入。粘土粒子点在。
6層　暗褐色土　ロームブロック・粒子、炭化物ブロック・粒子、FP混入（均質）。
7層　暗褐色土　焼土粒子、炭化物粒子、FP混入（均質）。砂質。
8層　黒褐色土　ロームブロック・粒子、FP混入（均質）。
9層　暗褐色土　ロームブロック・粒子、焼土粒子、FP混入（均質）。粘質土。
10層　暗褐色土　ロームブロック・粒子（多量・均質）混入。
11層　暗褐色土　ロームブロック・粒子（多量）混入。

第197図　山神17号住居址



第198図　山神17号住居址出土遺物(1)



第199図　山神17号住居址出土遺物(2)

cmを測る。

竈は東壁の南よりに付設されるが、右袖部及び上面が攪乱される。袖部は扁平な円礫を暗灰褐色の粘質土で固定・構築、土師器の長胴甕を両袖部に架架する。被熱の程度は比較的低い。燃焼部は、楕円形を呈する。

本住居址からの遺物の出土は、竈の構築材として竈周辺に集中する傾向がある。

山神17号住居址出土遺物（第198・199図、第78表、PL－89）

1から18は、土師器・杯である。

19・20は、土師器・椀である。21は、手捏ね土器の破片である。22は、胴部中央に円孔を穿つ土師器破片である。

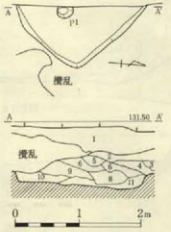
23は、土師器・甑。25～28は土師器・甕で長胴を呈する。29・30は須恵器の破片資料である。

山神18号住居址（第200図、PL－40）

本住居址は、山神II区の中央部（Dp－25，26G）に位置する。上面を1号溝及び耕作に伴う攪乱で破壊され、保存状況は良好とはいえない。

平面形態は、方形を呈するものと思われるが、ほとんどが調査区外に位置するため、規模等は不明である。壁は、ほぼ垂直に立ち上がると思われ、残存部での壁高5.6～35.0cmを測る。ピットは1本確認でき、深度20.5cmを測る。床面は、ほぼ平坦である。貯蔵穴・竈は、調査区内では確認できなかったが、調査区内の覆土からは、多量の焼土及び粘土ブロックが検出しており、調査区内からほど遠くない位置に竈が存在する可能性がある。

本住居址からの遺物の出土は、ほとんどない。



土層説明　2～4層は1号溝覆土

1層　現耕作土。
2層　黒褐色土　ローム粒子(少量)、焼土粒子、炭化物粒子、FP混入。
3層　暗褐色土　ローム粒子(少量)、FP混入。ロームブロック点在。砂質。
4層　暗褐色土　ローム粒子、炭化物粒子混入。
5層　黒褐色土　ローム粒子、炭化物粒子、FP(不均質)混入。
6層　黒褐色土　6層に酷似。ローム粒子少ない。
7層　黒褐色土　ローム粒子、焼土粒子、FP(均質)混入。
8層　暗褐色土　ロームブロック・粒子、焼土粒子混入。
9層　黒褐色土　7層に酷似。ざらざらしている。
10層　暗褐色土　ローム粒子、粘土ブロック・粒子、焼土粒子混入。
11層　暗褐色土　ロームブロック・粒子（多量）混入。焼土粒子点在。

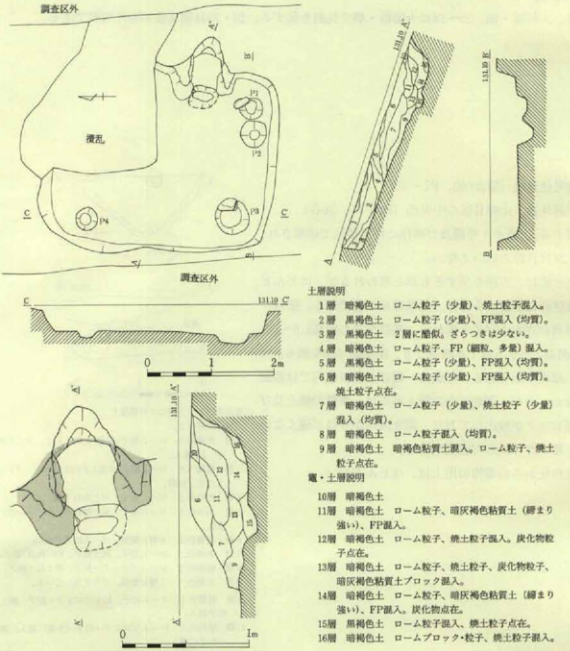
第200図　山神18号住居址

山神19号住居址（第201図、PL－40）

本住居址は、山神Ⅱ区の南部（Dq，Dr－25G）に位置する。北東部を攪乱により破壊される。

平面形態は、隅丸の長方形を呈し、東西2.80m、南北3.60mを測る。壁はやや緩やかに垂直に立ち上がり、壁高29.0～33.5cmを測る。壁溝は、確認できなかった。ピットは4本確認できたが深度はP1が13.6cm、P2が16.9cm、P3が12.9cm、P4が7.0cmとやや浅い。床面は、ほぼ平坦であるが明確な堅緻面は確認できなかった。貯蔵穴も確認できなかった。

竈は東壁南よりに付設される。燃焼部は、奥壁に向かい長楕円形を呈し、焚き口部は、やや窄む。袖部は、扁平な円礫を袖石として使用し、暗褐色の粘質土で固定・構築する。被熱の程度は低く燃焼部奥部で焼土化が認められる程度であった。



土層説明

1層　暗褐色土　ローム粒子（少量）、焼土粒子混入。
2層　黒褐色土　ローム粒子（少量）、FP混入（均質）。
3層　黒褐色土　2層に酷似。ざらつきは少ない。
4層　暗褐色土　ローム粒子、FP（細粒、多量）混入。
5層　黒褐色土　ローム粒子（少量）、FP混入（均質）。
6層　暗褐色土　ローム粒子（少量）、FP混入（均質）。焼土粒子点在。
7層　暗褐色土　ローム粒子（少量）、焼土粒子（少量）混入（均質）。
8層　暗褐色土　ローム粒子混入（均質）。
9層　暗褐色土　暗褐色粘質土混入。ローム粒子、焼土粒子点在。

竈・土層説明

10層　暗褐色土
11層　暗褐色土　ローム粒子、暗灰褐色粘質土（締まり強い）、FP混入。
12層　暗褐色土　ローム粒子、焼土粒子混入。炭化物粒子点在。
13層　暗褐色土　ローム粒子、焼土粒子、炭化物粒子、暗灰褐色粘質土ブロック混入。
14層　暗褐色土　ローム粒子、暗灰褐色粘質土（締まり強い）、FP混入。炭化物点在。
15層　黒褐色土　ローム粒子混入、焼土粒子点在。
16層　暗褐色土　ロームブロック・粒子、焼土粒子混入。

第201図　山神19号住居址

P１・P３脇からは24～30cm大の円礫が出土している。
本住居址からの遺物の出土は、非常に少ない。

第202図
山神19号住居址出土遺物

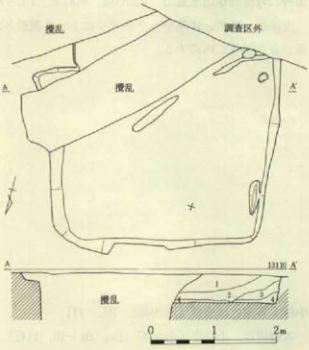
19号住居址出土遺物（第202図、第79表、PL－40）
実測した遺物は、須恵器の破片資料である。

山神20号住居址（第203図、PL－41）
本住居址は、山神II区の西部（Dn，Do－27，28G）に位置する。攪乱が大きく本住居址の中央部を切り、竈の保存状況も良くない。

平面形態は、隅丸の方形を呈し、東西3.35mを測るが、南壁が調査区外にあるため南北方向の規模不明である。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高39.7～53.9cmを測る。壁溝は、西壁の一部で確認でき、幅15.0cm、深度6.9cmを測る。ピット・貯蔵穴は確認できなかった。床面は、ほぼ平坦であるが明確な堅緻面は確認できなかった。

竈は東壁南よりに付設されるが、攪乱により破壊され形状・規模等は判然としない。

本住居址からの遺物の出土は、非常に少なく、実測資料はなかった。



土層説明
1層　黒褐色土　ローム粒子（均質）、FP混入。
2層　黒褐色土　ローム粒子（少量・均質）、FP混入。焼土粒子点在。多少ざらつく。
3層　黒褐色土　ローム粒子（少量）、FP（少量）混入。焼土粒子点在。2層より混入物少ない。
4層　暗褐色土　ロームブロック・粒子混入。

第203図　山神20号住居址

山神21号住居址（第204図、PL－41）

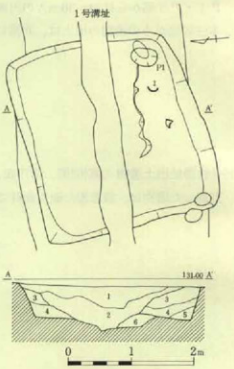
本住居址は、山神Ⅱ区の西部（Dn，Do－29，30G）に位置する。中央部を１号溝により切られ、保存状況は良くない。

平面形態は、やや歪んだ方形を呈し、東西3.00m、南北2.75mを測る。壁は、ゆゆ緩やかに立ち上がり、壁高42.0～50.9cmを測る。壁溝は、確認できなかった。床面は、ほぼ平坦であると思われるが、中央を１号溝により破壊されており、判然としない。

ピットは、１本、住居南東隅に確認でき、深度37.0cmを測る。

貯蔵穴・竈は確認できなかった。竈については、南壁及び北壁で確認できないことから、１号溝によって破壊された東壁もしくは、西壁に存在したものと思われる。

本住居址からの遺物の出土は、少なくＰ１の西の床面から土師器・杯（１）が出土した程度であった。



土層説明　１・２層は１号溝覆土
１層　暗褐色土　ローム粒子、炭化物粒子、FP混入。砂質。
２層　暗褐色土　１層土壌とロームブロックの混土層。
３層　黒褐色土　ローム粒子、炭化物粒子、FP混入。
４層　暗褐色土　ロームブロック・粒子、FP混入。
５層　暗褐色土　ロームブロック・粒子混入。
６層　暗褐色土　ロームブロック・粒子混入。住居掘り方埋土。

第204図　山神21号住居址

山神21号住居址出土遺物（第205図、第81表、PL－89）

土師器・杯で、体部をヘラケズリによって調整され、口縁部が直立気味に内湾する。

第205図　山神21号住居址出土遺物

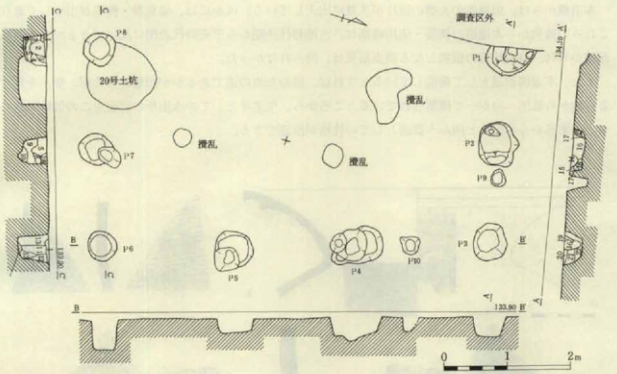
小林１号掘立柱遺構（第206図、PL－41）

本遺構は、小林Ⅳ区の北部（Bs，Bt－10，11G）に位置する掘立柱遺構である。

平面形態は、南北４間（6.0m）を測るが、西部が調査区外に存在するため、東西方向の規模については、不明である。

柱穴の深度は、Ｐ１　14.0cm、Ｐ２　17.0cm、Ｐ３　30.0cm、Ｐ４　40.0cm、Ｐ５　24.0cm、Ｐ６　50.0cm、Ｐ７　45.0cm、Ｐ８　27.0cmを測る。

柱穴の覆土中からの土器片等の遺物の出土はなかった。



土層説明

1層　暗褐色土　砂質。
2層　暗褐色土　ロームブロック混入。
3層　暗褐色土　ロームブロック、焼土粒子、炭化物粒子混入。
4層　暗褐色土　ローム粒子（均質）混入。
5層　暗褐色土　ロームブロック・粒子混入。
6層　黒褐色土
7層　暗褐色土　ロームブロック混入。
8層　暗褐色土　ロームブロック（多量）混入。
9層　暗褐色土　ロームブロック、黒褐色土ブロック混入。
10層　暗褐色土　ロームブロック混入。
11層　暗褐色土　ロームブロック・粒子点在。
12層　暗褐色土　ロームブロック、炭化物粒子混入。
13層　暗褐色土　ロームブロック点在。
14層　暗褐色土　ロームブロック・粒子混入。
15層　暗褐色土　ローム粒子（均質）混入。
16層　黒褐色土　ローム粒子混入。ロームブロック点在。
17層　黒褐色土　ローム粒子混入。
18層　暗褐色土　ロームブロック・粒子混入。
19層　暗褐色土　ロームブロック・粒子混入。
20層　暗褐色土　ロームブロック・粒子混入。
21層　黒褐色土　ロームブロック混入。
22層　暗褐色土　ロームブロック・粒子混入。

第206図　小林1号掘立柱遺構

小林道状遺構（第208図、PL－41，42）

本遺構は、小林Ⅴ区の東端（Ch～Ci－10，11,12）に位置する道状の遺構である。

遺構は、西部を8号溝により、また東部は台地から低地へ降りる近年の生活道により破壊され、判然としない点が多い。

遺構は、台地から低地に向かう傾斜面を斜めにカットし構築される。

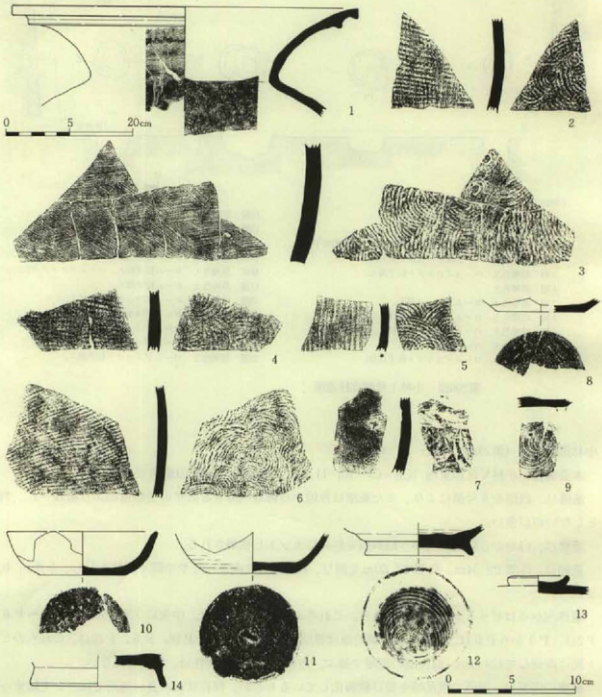
道幅は、西部で2.54m、東部で3.60mを測り、斜面下方に向かってやや開く形状を呈し、全長10.40mを測る。

遺構内からはピットが27本確認できた。これらのピットの配置は、中央に7本が並び（P1～P6、P24）、P1からP6は、約30cmの距離でほぼ等間隔で並ぶ。また、P18，P6，P20は、これらのピット列に直交して124.0cm、84.0cmの距離で並ぶ。他のピットに規則性は、認められない。

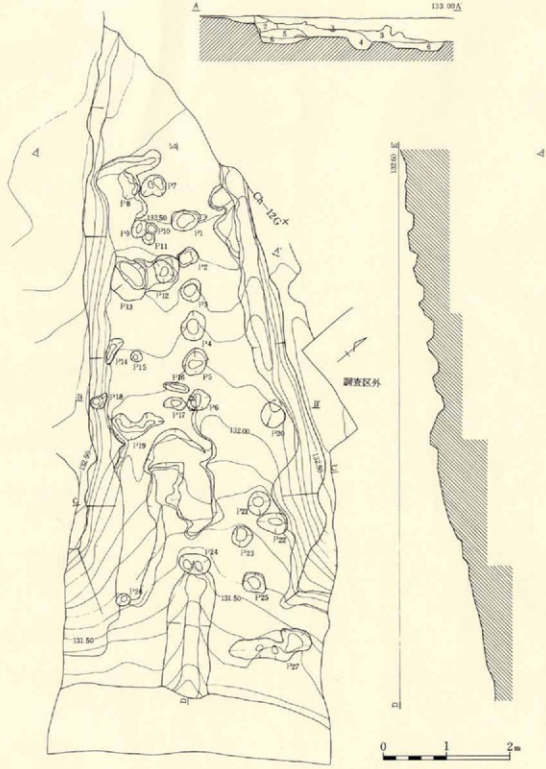
遺構の床面は、随所で攪乱等を受け軟弱化しているものの、保存状況の良い箇所では、よく締まっており、堅緻面が数層確認でき、長期間の使用が推定できる。

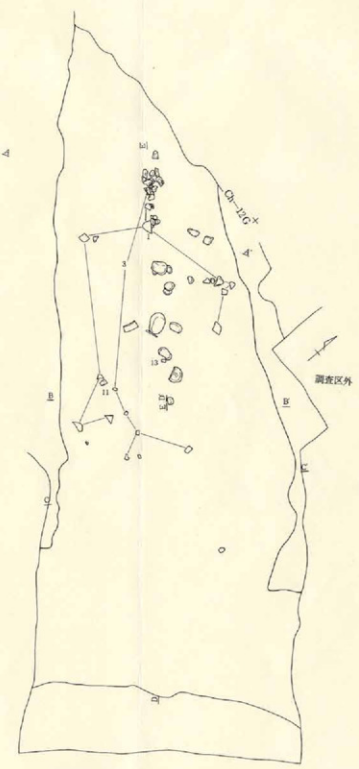
本遺構からは、須恵器の大甕の破片が多量に出土している。ほかには、須恵器・椀等が出土しておりこれらの遺物から本遺構の構築・使用時期は、古墳時代後期から平安時代の間に比定できるが、土層状況等からは、時期比定の根拠となる調査結果は、得られなかった。

また、本遺構が道として機能しているとすれば、何のための道であるかが問題となるが、集落を乗せる台地から低地へ向かって構築されているところから、生産址としての水田址の存在をこの低地に求めると、集落から水田へと向かう農道としての性格が推定できる。



第207図　小林道状遺構出土遺物





土層説明

1層　暗褐色土　ロームブロック混入。
2層　暗褐色土　ローム粒子（少量・均質）混入。
3層　黒褐色土　ローム粒子、焼土粒子、FP混入（均質）。
4層　黒褐色土　粘質土。
5層　暗褐色土　ローム粒子（多量・均質）混入。
6層　黄褐色土　ロームブロック・粒子混入。

第208図　小林遺状遺構

仕上がり線

小林道状遺構出土遺物（第207図、第81表）

1から7は、須恵器の大甕の破片。

8から12は、須恵器の椀の破片資料。

13は、須恵器の蓋。

14は、須恵器の高台部の破片

小林遺構外出土遺物（第209図、第82表）

ここでは、遺構外から出土した当該期の遺物について説明する。ここで遺構外とする遺物は、当該期以後の中・近世に比定できるの溝址の覆土中から出土した当該期の流れ込み遺物等も含む。

実測した遺物は、概して須恵器の破片資料に限定された。

1は、高台椀で、小林Ⅲ区の2号住居址の西部の攪乱中より出土している。

2は、須恵器・杯で底部を欠く。

3は、須恵器の口縁部破片である。

4から7は、須恵器・甕の胴部破片資料である。

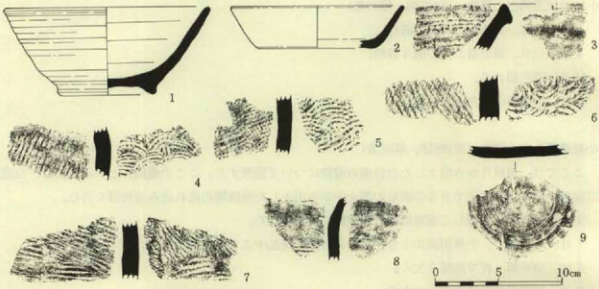
8は、須恵器の口縁部の破片で口唇部を欠く。

9は、須恵器底部の破片である。

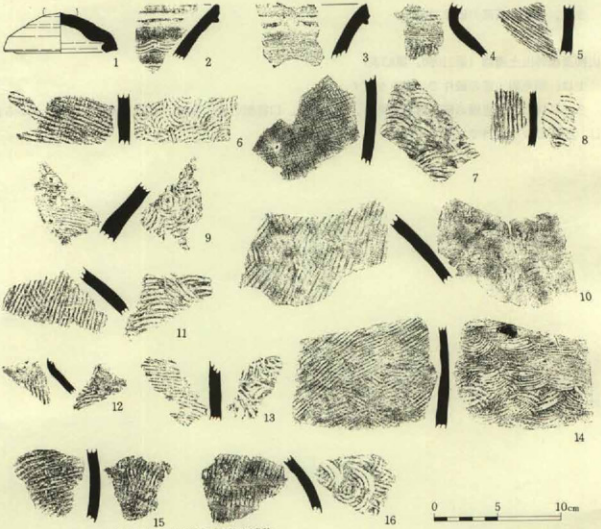
山神遺構外出土遺物（第210図、第83表）

1は、須恵器・蓋の破片で、摘みを欠く。

2から16は、須恵器の破片資料である。2，3は、口縁部の破片資料。4は、頸部の資料。5から16は、胴部の破片資料である。



第209図　小林遺構外出土遺物



第210図　山神遺構外出土遺物

4．中世～近世

概要

今回の調査において、中・近世に比定できる遺構は、溝状の遺構および土坑であった。なお、一部の遺構は、近年の遺構と断定できず、構築時期の比定のできない遺構も含んでここで説明する。

小林1号溝（第211図）

本溝址は、小林Ⅰ区の南部（An～Ap－17G）に位置する。

平安時代の1号住居址を切る。

溝の幅は、北部で1.68m、南部で2.08m、深度7.1～41.2cmを測る。断面形状はU字状の2段構造を呈する。底面の傾斜は、認められない。

出土遺物は、少なく実測資料の出土はなかった。

小林2号溝（第211図）

本溝址は、小林Ⅱ区（Aq～As－16，17G）に位置する

溝の幅は、36.0～56.0cm、深度3.0～29.8cmを測る。断面形状はU字状を呈する。

出土遺物はなかった。

小林3号溝（第211図、PL－44）

本溝址は、小林Ⅲ区の北部（As～Ba－16，17G）に位置する。

古墳時代後期の2号住居址の竈の煙道部を切る。

溝の幅は、西部で2.10m、東部で1.28m、深度45.6～59.0cmを測る。断面形状は、北側で緩やかに傾斜し、南側でやや急に傾斜し、U字状を呈する。

底面は、西から東へ向かって傾斜する。

出土遺物は、流れこみの縄文土器片・土師器片が出土しているが他に本遺構の構築・使用時期を比定できる遺物の出土はかった。

小林4号溝（第211図）

本溝址は、小林Ⅲ区の北部（At，Ba－16，17G）に位置する。

古墳時代後期の2号住居址の竈の一部を切る。

溝の幅は、36.0～80.0cm、深度7.7～21.1cmを測る。断面形状はU字状を呈する。

底面は、西から東へ向かって傾斜する。

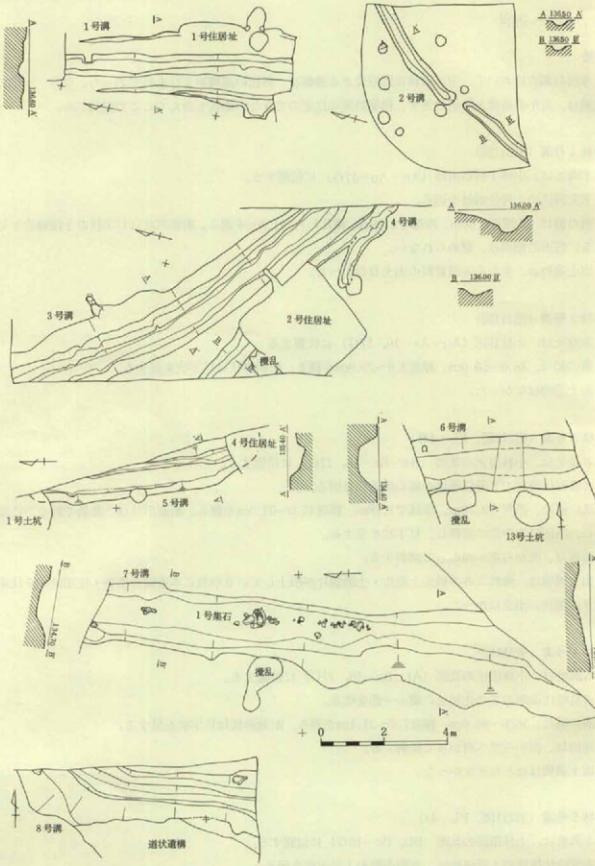
出土遺物はほとんどなかった。

小林5号溝（第211図、PL－44）

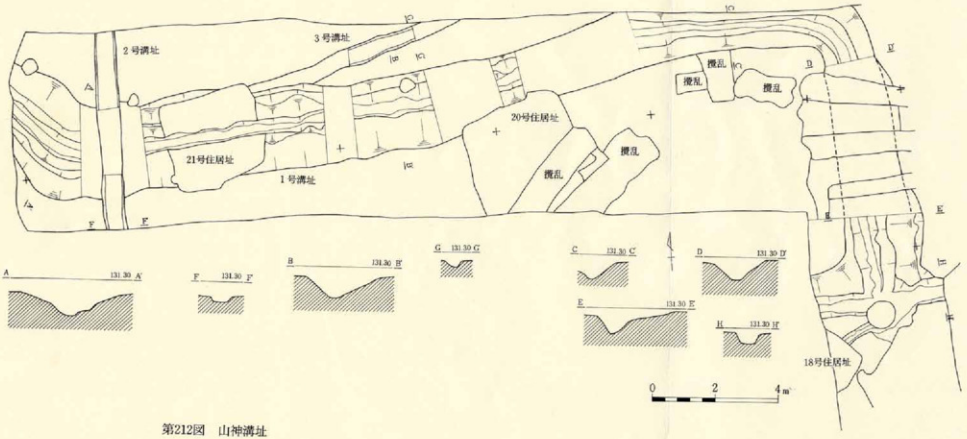
本溝址は、小林Ⅲ区の北部（Bb，Bc－15G）に位置する。

古墳時代後期の4号住居址、時期不明の1号土坑を切る。

溝の幅は、東部が調査区外にあるため判然としないが、約1.60m、深度28.7～39.6cmを測る。断面形


1号溝
1号住居址
2号溝
A 136.80 A'
B 136.80 B'
4号溝
3号溝
2号住居址
攪乱
4号住居址
5号溝
1号土坑
6号溝
13号土坑
7号溝
1号集石
8号溝
道状遺構
0
2
4m

第211図　小林溝


2号溝址
3号溝址
21号住居址
1号溝址
20号住居址
攪乱
攪乱
攪乱
攪乱
18号住居址
A 131.30 A'
F 131.30 F'
B 131.30 B'
G 131.30 G'
C 131.30 C'
D 131.30 D'
E 131.30 E'
H 131.30 H'
0 2 4m

第212図　山神溝址

状は、西側で緩やかに傾斜し、東側ではやや急な立ち上がりを呈する。

底面は、北から南へ傾斜する。

出土遺物は、流れこみの縄文土器片・土師器片が出土しているが他に本遺構の構築・使用時期を比定できる遺物の出土はなかった。

小林6号溝（第211図、PL－44）

本溝址は、小林Ⅲ区の中央部（Bi－14，15G）に位置する。

溝の幅は、1.40～1.80m、深度52.0～55.3cmを測る。断面形状は、やや緩やかに立ち上がる箱形を呈する。

底面は、西から東へ傾斜する。

出土遺物は、流れこみの縄文土器片・土師器片が出土しているが他に本遺構の構築・使用時期を比定できる遺物の出土はなかった。

小林7号溝（第211図、PL－44）

本溝址は、小林Ⅳ区の東南部（Cc～Cf－9G）に位置する。

溝の幅は、2.00～3.12m、深度37.7～48.3cmを測る。断面形状は、北部ではU字状を呈し、南部では緩やかに傾斜するV字状を呈する。

底面は、北から南へ傾斜する。

出土遺物は、流れこみの縄文土器片・土師器片が出土しているが他に本遺構の構築・使用時期を比定できる遺物の出土はなかった。

小林8号溝（第211図、PL－45）

本溝址は、小林Ⅴ区の東部（Cg～Cf－11～13G）に位置する。

溝の幅は、1.40～2.00mを測る。断面形状は、U字状の2段構造を呈する。

底面は、西から東へ傾斜する。

出土遺物は、流れこみの縄文土器片・土師器片が出土しているが他に本遺構の構築・使用時期を比定できる遺物の出土はなかった。

山神1号溝（第212図、PL－45）

本溝址は、山神Ⅱ区の西部（Dn，Do－25～31G）に位置する。

溝の幅は、2.28～3.52m、深度53.7～70.7cmを測る。断面形状は、やや緩やかなV字状を呈する。

底面は、東から西へ傾斜する。

出土遺物は、流れこみの縄文土器片・土師器片が出土しているが他に本遺構の構築・使用時期を比定できる遺物の出土はなかった。

山神2号溝（第212図、PL－45）

本溝址は、山神Ⅱ区の西部（Dn，Do－30G）に位置する。

溝の幅は、64.0～72.0cm、深度15.2～18.3cmを測る。断面形状は、やや緩やかに立ち上がる箱形を呈

する。

出土遺物は、流れこみの縄文土器片・土師器片が出土しているが他に本遺構の構築・使用時期を比定できる遺物の出土はなかった。

山神３号溝（第212図、PL－45）

本溝址は、山神Ⅱ区の西部（Dn－28，29G）に位置する。

溝の幅は、48.0～72.0cm、深度12.7～16.6cmを測る。断面形状は、V字状を呈する。

出土遺物は、流れこみの縄文土器片・土師器片が出土しているが他に本遺構の構築・使用時期を比定できる遺物の出土はなかった。

小林１号土坑（第213図、PL－46）

本土坑は、小林Ⅲ区の北部（Ba，Bb－15，16G）に位置する。

平面形態は、円形を呈し直径3.04mを測る。壁は摺り鉢状に緩やかに傾斜し、壁高141.0cmを測る。

底面には、直径40.0cmを測る円形の付属施設を持つ。

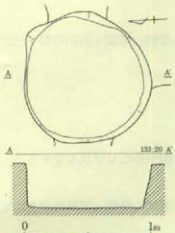
出土遺物は、ほとんどなかった。

小林30号土坑（第214図、PL－46）

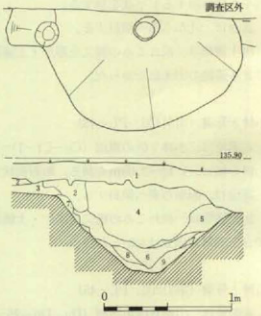
本土坑は、小林V区の中央東より（Ch－13，14G）に位置する。

平面形態は、円形を呈し、直径100.0cmを測る。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高35.5cmを測る。坑底面は、平坦である。

出土遺物はなかった。



第214図　小林30号土坑



土層説明

1層　暗褐色土　現耕作土。砂質

2層　黒褐色土　ローム粒子、FP混入。ざらざらしている。

3層　暗褐色土　ローム粒子（均質）混入。

4層　黒褐色土　ローム粒子、FP混入。

5層　黒褐色土　ローム粒子、FP（少量）混入（均質）。

6層　黒褐色土　ロームブロック・粒子（中量）、FP混入。ざらざらしている。

7層　黒褐色土　ロームブロック・粒子混入。

8層　黒褐色土　ロームブロック・粒子、FP混入。細かく均質

9層　黒褐色土　ローム粒子（均質）混入。

第213図　小林１号土坑

V　調査のまとめ

1．先土器時代

今回の調査によって、出土した先土器時代の遺物は2点であり、出土地点が明確な資料は、小林Ⅰ区で確認された、黒曜石製の削器の1点のみであった。また、遺跡の保存状況の悪さとも重なって当初期待された、三ツ屋遺跡の追調査としての、充分な成果は得られなかった。

2．縄文時代

縄文時代ついては、中期加曽利Ｅ式初頭の良好な資料を得られたことがあげられよう。

加曽利Ｅ式の土器については、近年資料の増加と相俟って研究が進み、さまざまな論考が加えられている。また、その反面、混乱する状況を呈していることも否めない。本遺跡において出土した加曽利Ｅ式の土器群は、概ね群馬県においてＥ１式段階として把握され、勝坂・阿玉台式的な要素を色濃く残す土器群である。この段階の土器については、赤城村三原田遺跡、渋川市行幸田山遺跡等において分析が試みられているが、いまだ確定していない状況であり、本遺跡出土の土器をこれらの成果に照らしてみても一様に論ずることが非常に困難である。

また、調査における新旧関係所見からこれらの土器を段階設定することもできない状況であり、今後の検討課題としておく。

本遺跡における縄文時代の遺構は、上記の加曽利Ｅ１式期の集落として把握できる。本遺跡の東の対岸に位置する上ノ山遺跡が加曽利Ｅ３式期を中心とした大集落であるのに比して、Ｅ１式期に限定された遺跡である。

当該期の住居址は、7軒検出されたが、全体構造が判明した住居址は3軒と限定される。このらの住居址をもって、本遺跡の集落構成を検討するには少々難があるが、住居構造は次のとおりである。

住居の平面形態は、すべて円形を呈する。炉は、地床炉・土器埋設炉である。

3．古墳時代～奈良・平安時代

本遺跡で検出された遺構で古墳時代のものは、後期鬼高期のもので住居址13軒が検出された。

住居の平面形態は、隅丸方形を呈し、竈を北壁もしくは東壁に付設する。貯蔵穴は、竈の右側の付設される。柱穴は、住居址の規模によって、分けられる。小型の住居址においては、柱穴を持たない。柱穴を持つものも4本主柱が基本形態であると考えられる。

奈良時代の遺構は、住居址が5軒検出された。本時代の住居の平面形態は、やはり隅丸方形を呈し、竈を東壁に付設する。貯蔵穴は、竈の右側に付設される。柱穴は確認されないものが多い。

平安時代の遺構は、住居址が2軒検出された。本時代の住居の平面形態は、やはり隅丸方形を呈し、竈を東壁に付設する。貯蔵穴は、竈の右側に付設され、柱穴は確認できない。

4．中世～近世

本時代の遺構については、明らかに当該時代の所産と考えられるものは少ない。

溝址を本時代の所産としたが、すべてが同時代に存在していたかは、明らかでない。

小林1号、3号、5号、6号、7号、8号溝、山神1号溝については、地割りに一致しており、その性格を考える上で注意する必要がある。